「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展

報告書

「10 年間ふるさとなみえ博物館」実行委員会

はじめに

2021 年秋からスタートした巡回展「10 年間ふるさとなみえ博物館」が、このたび全日程を終え、報告書をとりまとめることになりました。この巡回展、西日本自然史系博物館ネットワークには、2021 年 2 月に高田みちよさんから「最後の 6 年生と教員、ボランティアが作った展示がすんごいいいもので、もっとみんなに見てもらいたいの」といった紹介とともに、「西日本での事業として、巡回展をするのはいかがでしょうか。郷土教育とはなんぞや、というのがよくわかるすばらしい展示です」という提起があり、話がスタートしました。年度当初の事業計画に無くても、魅力的な企画であればためらわずに実行に移すのが私たちの流儀です。理事の間で承認の上、ただちにネットワークのメーリングリストを通じて参加を呼びかけました。巡回展の準備は実行委員会形式で進められ、短期間の調整によって 6 館によるスケジュールが決まりました。当ネットワークも実行委員会の一員として参画させていただきました。実施に当たっては、地元の浪江町教育委員会の方々にはたいへんお世話になり、また福島県立博物館には共催館として心強いサポートをしていただきました。厚く御礼申し上げます。

「ふるさとなみえ科の展示をなぜ関西で開催するのか？」というこの巡回展開催に付き纏う疑問に対する答えはこの報告書の中にあります。ぜひ最後の「ふりかえり会」の記録まで目を通してください。

特定非営利活動法人　西日本自然史系博物館ネットワーク
理事長　山西良平

2021 年 3 月、「10 年間ふるさとなみえ博物館」が避難先の二本松市で再開していた津島小学校の閉校に伴い、閉館しました。この博物館は、避難先で 2011 年 8 月に再開した浪江小学校、2014 年 4 月に再開した津島小学校の「ふるさと学習」の集大成です。東日本大震災及び原発事故により、避難先での学びを強いられた子どもたちは、多くの方々に支えられ、「ふるさと」を学びました。もし、浪江町に住んでいたら、ここまで深く「ふるさと」を考えること、学ぶことができなかったかもしれません。「10 年間ふるさとなみえ博物館」が閉館した際は、この取り組みをしまっておくだけではいけないと感じており、巡回展のお話しをいただいたときには、快諾させていただきました。福島県浪江町から遠く離れたところでの巡回展のため、そもそも浪江町ってどこ？この取り組みって何？と思われる方もいたかと思います。見て感じるのは人それぞれだと思いますが、多くの方に児童の取り組み、浪江町、そしてふるさとについて、知って、考えていただければ幸いです。巡回展実行委員会、福島県立博物館の皆様にはお世話になり、厚く御礼申し上げます。今後も、「10 年間ふるさとなみえ博物館」を、多くの方に見ていただく機会を作っていきたいと考えておりますので、お近くにお立ち寄りの際は、浪江町へ是非お越しください。

浪江町教育委員会事務局　学校教育係
吉田　克則

目　　次

10 年間ふるさとなみえ博物館とは？／川延安直・小林めぐみ・・・・・・・・・・・・・・・ 3
二本松市での展示をみて／西澤真樹子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
関西で巡回展を！／高田みちよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

「１０年間ふるさとなみえ博物館」巡回展報告
「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会 趣意書・・・・・・・・・・・ 11
① 高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
② 龍谷大学 瀬田学舎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
③ 大東市立歴史民俗資料館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
④ 滋賀県平和祈念館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
⑤ きしわだ自然資料館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
⑥ 伊丹市昆虫館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

学会等での発表の機会を得て／北村美香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
報道記録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展を終えて ふりかえり会・・・・・・・・・・ 62
展示の放つメッセージを考える／佐久間大輔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76

※ 「ふるさとなみえ博物館」沿革

2011 年 3 月 11 日　東日本大震災発生、福島第一原発事故発生、全町避難
8 月 25 日　福島県二本松市にて、浪江町立避難先再開小学校として浪江小学校を再開
2014 年 4 月 1 日　浪江町立避難先再開小学校として、津島小学校を浪江小学校と合流させて再開
2020 年 3 月 31 日　浪江小学校の最後の児童が卒業し、浪江小学校が休校
2021 年 3 月 31 日　津島小学校の最後の児童が卒業し、津島小学校が休校。休校前の 3 月に 10 年間の成果発表として、最後の児童である須藤嘉人くんを初代館長とし、「10 年間ふるさとなみえ博物館」を校内で開催。
2021 年 9 月～2022 年 6 月　「10 年間ふるさとなみえ博物館」を関西にて巡回展示

※ 2021 年 3 月に福島県二本松市の浪江町立避難先再開小学校で行われた「10 年間ふるさとなみえ博物館」を記録した「10 年間ふるさとなみえ大事典」は特定非営利活動法人 西日本自然史系博物館ネットワークのホームページから閲覧することができます。
http://www.naturemuseum.net/blog/2021/09/_10.html

10 年間ふるさとなみえ博物館とは？

「10 年間ふるさとなみえ博物館」の関西巡回展を実現した各館、団体の関係者の皆さんにまず敬意を表します。その上で、ここでは、私が関わった「10 年間ふるさとなみえ博物館」の前身としての活動をご紹介します。

きっかけは 2012 年度から福島県立博物館がおこなっていた「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」でお世話になっていた特定非営利活動法人まちづくり NPO 新町なみえの原田雄一さんからの電話でした。「学校のために協力してほしい」とのこと。詳しい内容は記憶にありませんが、原田さんの優しく誠実な口調で「とにかく良い学校なんです。」と繰り返し聞かされたように思います。

浪江町から二本松市の空き校舎に避難していたその学校、浪江小・津島小をお訪ねし当時の遠藤校長先生はじめ先生方とお会いして、原田さんのおっしゃっていたことが分かりました。生徒数の減少により長らく閉校になっていた校舎はおしゃれでもきれいでもなかったのですが、温もりが感じられました。至る所に工夫された掲示物や生徒の工作が展示されていました。その時、気づかされたのが、避難校の存在です。東京電力福島第一原子力発電所事故に伴い多くの学校が福島県内各地に避難しました。もちろん校舎がそのまま移動するのではなく、学校機能が移動するのですが、もともと学校とは地域に強く根ざした存在です。そこには多くの困難があったと想像します。この時に避難校の資料を保全する必要性を感じたことが、「10 年間ふるさとなみえ博物館」へのかすかな胎動だったかもしれません。原田さんも学校と同じく浪江町から二本松市へ避難している町民の一人で、熱烈な学校の応援団でもありました。学校は生徒たちだけのものではありません。生徒の親を含め地域の人たちの心の拠り所でもあったのです。今となっては当たり前と思えるこのことも原田さんたちとの出会いで知りました。

さて、それではどのような協力が我々にできるでしょうか。もやもやと考えながら先生方と相談する中で、生徒たちが 2011 年度から取り組んでいる地域カルタが話題になりました。早速拝見すると、即座に絵本作家・飯野和好さんのことが頭に浮かびました。東日本大震災以前から存じ上げていましたが、震災後は福島県内各地で読み語りや紙芝居制作のワークショップをご一緒していました。飯野さんのタッチが生徒たちのカルタをより力強いものにしてくれると確信しました。作り貯められたカルタをよく見ていくと、リアルな浪江町を知る高学年の生徒の絵札から、映像やイラストでしか浪江町を知らない低学年の生徒の絵札に移るに従い、次第に精彩が失われていく様子に原発事故の罪深さを思わされました。2015 年度に飯野さんとの制作時間を重ねて生まれたカルタは「なみえっ子カルタ」として完成しました。この時に熱心に絵札を描いてくれた低学年の生徒の一人が後の「10 年間ふるさとなみえ博物館」の館長、須藤嘉人くんでした。カルタは仮設住宅でのカルタ会などで楽しんでもらい、当時の馬場有町長も大変喜んでくださったそうです。カルタ制作を通じてより緊密になった浪江小・津島小では、その後 2016 年度に「まるごとなみえ博物館」に取り組みました。校内には避難後の生徒たちの活動「ふるさとなみえ科」の成果であるさまざま造形物、発表物があり、それらを段ボール製の簡易な展示台を設置して展示しました。校舎を避難校の博物館として見立て、これまでに例のない学校の長期避難を考える場としたのです。この年度の活動は「まるごとなみえ博物館」の設置でひとまず終了しましたが、その後、令和を迎え再び浪江小・津島小での活動が始まることになります。（川延）

いくつかのプロジェクトの一つ「なみえ学校プロジェクト」で、2015 年度・2016 年度に浪江小・津島小と

活動した「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」は、博物館ができる福島への文化的な復興支援事業として一定の役割を終え、2017 年度で終了しました。2018 年度からスタートした「ライフミュージアムネットワーク」は、震災と原発事故から学んだ「いのち」と「くらし」の大切さにミュージアムの機能とネットワークで向き合おうとしたものでした。

事業に関わっていただきたいと川延さんから提案されたのがアーティストの折元立身さん。認知症の母・男代さんとの暮らしに取材した表現活動をされていました。折元さんの人間への敬意と愛情を基盤としたパフォーマンスアートに力を借りて福島で「いのち」と「くらし」を考える現場は、二本松市にお世話になることにしました。2017 年に浪江町の役場機能が浪江町に帰還した後も、二本松市を生活再建の場と決めた浪江町民は二本松市内に建てられた復興公営住宅などで暮らしていました。そうして、折元さんに導かれながら、浪江町と二本松市の皆さんとそれぞれの土地のことと震災後を学び合う交流の場「浪江・二本松交流のこれまで・これから」を 2019 年度に 4 日間に渡って実施。4 回の連続オープンディスカッションの初回「福島の記憶を学ぶ～二本松に避難した浪江小学校のふるさと学習のあゆみ」では、当時の浪江小学校長・木村裕之先生にお話をお聞きしました。浪江と二本松の 2011 年以降の交流とこれからを考えるディスカッションに、浪江小学校・津島小学校は外せない事例だと考えたからです。ふるさと学習をはじめた遠藤校長先生から志を引き継ぎ、木村校長先生は少なくなった在校生（浪江小学校 1 名、津島小学校 1 名）の学びの時間と、浪江町民の皆さんとの関係性を丁寧に作り続けていました。地域における小学校の意義について、集まってくださった浪江町、二本松市の皆さんと語り合ったディスカッションの後、木村校長先生から相談を受けました。「浪江小学校・津島小学校最後の小学生が卒業する 2020 年度までに、この 10 年間の小学校の活動を展示する博物館を小学校内に作りたい」ということでした。

2020 年度のライフミュージアムネットワークは、プログラム開発という事業枠を設け、ミュージアムの新たな機能拡張につながる 3 つのチャレンジを行うことにしました。その一つ、地域の文化資源は災害や大事故の際に地域のアイデンティティ再生に寄与できるのか？をテーマとしたプログラム開発では、浪江町の文化資源の一つ「大堀相馬焼」が避難生活を続ける浪江町のみなさんにとってどのような存在なのかを探り、地域の文化財を収蔵するミュージアムの役割を再認識しようとするものでした。「大堀相馬焼」は浪江小学校・津島小学校がふるさと学習で扱ってきた大事な要素。子どもたちが学ぶ素材であり、子どもたちと浪江町の皆さんとの交流ツールにもなっていることは、2016 年、2017 年度に教えていただいていたことでした。より具体的にヒアリングするために、私たちは浪江小学校・津島小学校最後の生徒となった津島小学校 6 年生・須藤嘉人くんの 2011 年～2021 年の両校の歴史を伝える博物館づくりに伴走することにしました。

最初の授業ではミュージアムには使命があることを伝えました。「嘉人くんは何のためのミュージアムを作りたいのか、言葉にしてみてください」。次に津島小学校を訪れた時には、嘉人くんのスケッチブックに 3 つの使命が記されていました。この頃から、私たちは敬意を込めて「嘉人館長」と呼ぶようになっていたと思います。次に博物館の名前を嘉人館長に考えてもらいました。さらに博物館の看板のデザインと設置位置も。名称は「10 年間ふるさとなみえ博物館」に決まりました。看板は、浪江だけでなく第二の故郷となった二本松の文化も学んできた同校のふるさと学習に倣って、浪江町の大堀相馬焼で文字を作り、二本松家具のデザインを取り入れた板に貼り付ける案を提案しました。文字のレイアウト案も固まり、設置場所は教室の引戸になりました。嘉人くんの発想の豊かさに感服した設置位置でした。大堀相馬焼の看板の文字は、原田雄一さんをはじめとする浪江町の皆さんも参加した授業で分担しながら作られました。続く開館準備作業は資料整理。嘉人館長が言葉にした使命を実現するためには、どんな展示が良いのか。展示プランを考えるために、展示資料とな

る収蔵資料の情報のカード化を薦めました。福島県立博物館の資料調査カードをベースに、津島小学校用のカードを作成。展示候補となる資料の名称、作られた年、作った人、何でできているか、などをまとめ、画像をつけたカードを作ってもらいました。嘉人くんだけではなく校長先生をはじめとする先生たちも分担して資料カードづくりが行われたと後からお聞きし、学校をあげての博物館づくりだと実感したのを覚えています。資料カードが完成すると、いよいよ展示プランの作成。展示構成を作る際のバリエーション（テーマどりの仕方）を伝えた後、嘉人館長が考えたのは、10 年間の小学校の歴史を 1 期、2 期、3 期に分けて構成する時系列の構成でした。1 期は浪江町の記憶もある生徒たちが浪江を学んでいた時期。2 期は浪江と二本松の両地について学んでいた時期。そして 3 期は両校の歴史をまとめ、発信しようとした時期。該当時期に合わせてカードを使って資料を選び、展示室となる教室の図面に配置してみます。教室という特徴を活かし、ふるさと学習で作られた大堀相馬焼の茶碗や皿は、後ろのロッカーに飾ることにしました。続いて、キャプションやパネル、館長あいさつの作成。キャプションやパネルの役割や作り方を説明すると、嘉人館長は 3 期を色分けしたキャプションデザインを考案しました。館長あいさつには館長の自筆サイン、展示用の「博物館の使命」は江戸時代から作られている二本松の上川崎和紙に館長が手書きで書くことを提案したのですが、「博物館の使命」も墨書するかと思いきや、嘉人館長は落ち着いた青の絵の具でその大切な言葉を記しました。展示のための教室での造作作業、キャプション、パネル制作。最初の展示作業をおこなったのは、2020 年の 12 月だったでしょうか。

数回の展示作業と微調整を経て「10 年間ふるさとなみえ博物館」は、2021 年 2 月 25 日に開館。そのお披露目会で、嘉人館長は「初代館長　須藤嘉人」と名乗って挨拶をしました。次の館長に引き継いで欲しいという嘉人くんの意志の表れと私には聞こえました。

嘉人館長が作った「10 年間ふるさとなみえ博物館」はその使命と共に、次の人々に託されました。それを一緒に担ってくださったのが、今回の関西巡回展を実現してくださった各館や関係者の皆さんなのだと思います。「10 年間ふるさとなみえ博物館」が伝え、問いかけること。それが関西でどう受け止められ、展開するのか。そしてそのことがどのように福島に帰ってくるのか。少しの不安と大きな期待を抱いて、関西のミュージアムのネットワークの機動力と実行力に惚れ惚れとしながら見守り続けた関西巡回展でした。（小林）

※プログラム開発「地域資源の活用による地域アイデンティティの再興プログラム」大堀からの 10 年記録集 PDF はこちら
https://general-museum.fcs.ed.jp/page_about/archive/life-museum-network/record-book2020_2019_2021/record-book2020

福島県立博物館
専 門 員　　川 延 安 直
専門学芸員　小林めぐみ

二本松市での展示をみて

私は 2011 年から、被災した東北沿岸の博物館支援を目的とした有志の集団「東北遠征団」を立ち上げ、岩手県、宮城県の沿岸部に出入りしていました。ただ、最初の 3 年間は福島県での活動頻度は低く、ほとんど関われていません。その理由は福島第一原子力発電所の事故と放射能被害です。

宮城での活動に合わせて、何度か個人的に福島県に入ったことはありました。仙台から南に車を走らせればあちこちに見えてくる空間線量の測定器、除染作業を行う作業員相手のお弁当が山のように積まれたコンビニ、あちこちに現れる真っ黒いフレコンパックの山に気分がどんどん落ち込みました。そんな中に、学生も多かったボランティアたちを大勢連れて入ることに自分の中で気持ちの整理がつかず、岩手や宮城と同じような活動はできない、どう動いたらいいのだろうと 3 年躊躇してしまったのです。

ようやく 2014 年、知人を通じていわき市のアートフェスティバルに声をかけていただいたのをきっかけに、市内の校長先生とつながり、小学校や図書館のある複合施設での子どもワークショップが実施できました。その時に間に入ってくださったのが、福島県立博物館学芸員の小林めぐみさんでした。

それからしばらく経った 2020 年の 2 月、福島民友のネットニュースで「二つの古里、刻む博物館 津島小唯一の在校生、須藤くん 校内で 2 月から」という記事を目にしました。二本松市の避難先再開校で浪江町の子どもたちが地域学習を 10 年間続けていたこと、その成果を「ふるさとなみえ博物館」としてまとめていたこと、そこに福島県博の小林さんが関わっていたこと、展示は一般公開されていると知り、これはどんなことがあっても見に行かなくてはと、博物館仲間の高田さん、北村さんを誘って二本松に向かうことになったのです。

浪江町立避難先再開小学校

浪江町津島小・浪江小の 2 つの校名が掲げられていた

入口。ようこそ、と書かれていてほっとした案内板

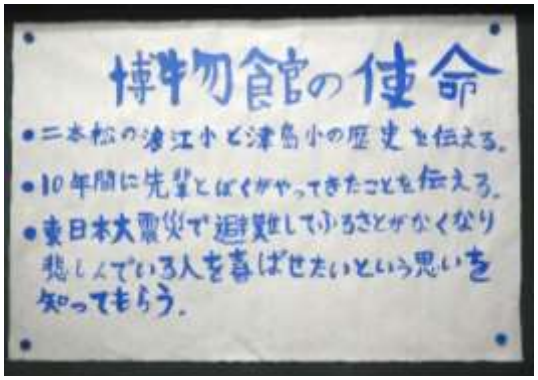
片づけられていない式場

小林さんが連絡してくださり、木村校長先生に展示をご案内いただきました。訪問した日は展示を制作した初代館長須藤嘉人くんの卒業の翌日で、式のしつらえがそのままありました。

二本松の家具と浪江の大堀相馬焼を組み合わせた博物館看板は、毎日必死で溝を彫って加工したと、校長先生が笑いながら話してくださいました。

博物館看板

ザルに金紙を貼ったくす玉に来場者数が書かれている



博物館の使命

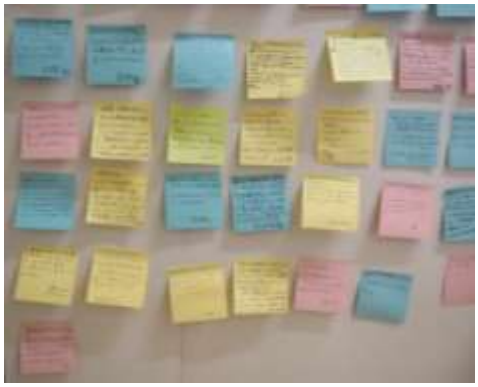
展示室はまず、二本松の手すき和紙に海色で書かれた館長直筆の「博物館の使命」、館長あいさつにはじまり、10 年の地域学習の取り組みを 3 つの展示群（初期 2011-2014 年、中期 2015-2018 年、後期 2019-2020 年）に分け、それぞれの時期の特徴を紹介していました。展示は教室内だけでなく外にもあり、特に初期、先輩たちの作った「なみえっ子カルタ」に登場するポイントを季節ごとに追跡調査した「なみえっ子カルタマップ」は見応えがありました。壁新聞は、現在の状況とこれからへの希望が書かれてあり、端から端まで読んでしまいました。

なみえっ子カルタマップ

壁新聞

展示を見ていたのは 2 時間ほどだったでしょうか。ひとつひとつの展示物の持つ背景と情報量に打ちのめされながら、心の中にはいろいろな思いが行き交いました。「博物館の使命」に感動し、これを日本中の博物館関係者や学芸員を目指す学生に見せたいという思い、避難生活を送った人たちの 10 年間の本物の生活を小学校という生活の真ん中の場所で見せてもらっている申し訳ない思いなどです。

年表と交流の記録



博物館の感想

中でも最も印象的で感動したのは「博物館の感想」コーナーでした。浪江町津島地区出身の方、学校が開校する頃から子どもたちが来ることを楽しみにしていた二本松市の方など、どちらの地域の人もこの展示を喜び、誇らしく思う声を書き込んでいました。つまり、館長が掲げた展示の目的「東日本大震災で避難してふるさとがなくなり、悲しんでいる人を喜ばせたいという思いを知ってもらう。」が大成功したところまでを、一つの教室と廊下を通して見せてくれていたのでした。

帰り際ふと、あまりにも見事なこの展示の行く末が気になり、校長先生にお伺いしたところ、閉校後の保管方法などは未定とのこと。なんとかできないだろうか、散逸したり廃棄になったらもったいなさすぎる、もっと大勢の人に観て欲しいし、特に福島から遠い地域にこそ見せたい。災害とはどういうことなのか、ふるさとを残すとはどういうことなのか、子どもたちそして地域の人たちのそれぞれの言葉で具体的に知ることは大きな意味があるはず…と興奮気味に話しながら帰りました。

そんな願いが、巡回展として実現しました。強力な実行力と連携力で、多くの人たちに「ふるさとなみえ博物館」を届けてくれた事務局の高田さん、北村さん、そして実行委員会のみなさんに感謝します。福島県立博物館の川延安直さん、小林めぐみさん、浪江町と私たちをつないでくださりありがとうございました。

特定非営利活動法人　大阪自然史センター
西澤真樹子

関西で巡回展を！

2021 年 3 月 24 日、（NPO）大阪自然史センターの西澤真樹子さんに連れられて、結 Creation の北村美香さんと私の 3 人で、二本松市での浪江町立避難先小学校の「10 年間ふるさとなみえ博物館」の展示を見に行きました。私にはこの出張に別の目的があり、この展示については西澤さんについていっただけで、事前にどういう展示かは調べていませんでした。

小学校につくと、嘉人館長の案内板があり、校庭から展示室まで誘導されました。展示室に入るとすぐに木村裕之校長先生が現れ、展示解説をしてくださいました。小学校では開校から 10 年間、「ふるさとなみえ科」というカリキュラムを行ってきて、この展示は授業の中で小学生たちが作ったものであること、しだいに浪江町のことを覚えていない一年生が入学してくるようになり、新しいふるさとである二本松市のことを学習するようになったこと、最終年の 2021 年は唯一の児童である須藤嘉人くんが館長となって、今までに自分と先輩たちが作ってきた壁新聞やカルタから、どれをどう配置するのかを考えて展示を作ってきたこと、などを教えていただきました。校長先生の説明を聞きながら、いちいち「すごい展示だ！」と 3 人共が驚き、刺激を受けました。特に嘉人くんが自分で考えた博物館の使命が心に残りました。

その夜、展示作成の指導をされた福島県立博物館の学芸員、小林めぐみさん、川延安直さんたちと会い、「博物館学芸員は嘉人館長の使命から学ぶべきじゃないか」など、「あの展示はすごい！」という話から、「関西でも展示できないだろうか」と発展し、「高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）ではＮＰＯ法人が指定管理者なのでフットワークが軽いし、来年度中の展示ができるんじゃないだろうか」となりました。当初はあくあぴあだけでの予定でしたが、大阪市立自然史博物館の佐久間大輔学芸員から、（ＮＰＯ）西日本自然史系博物館ネットワークでの巡回展にしたらどうか、という提案をいただきました。佐久間さんはあくあぴあの運営委員でもあり、西日本ネットの理事でもあります。私自身も理事なので、理事会に諮り、2021 年度事業の承諾を得ました。浪江町教育委員会にも展示協力の承諾を得て、西日本ネットの会員に「巡回展会場になりませんか」というお誘いをしたところ、4 館 1 大学から手が挙がり、今回の巡回展のスケジュールが決まりました。コロナ禍でオンライン会議のスキルが上がっていたことにも救われ、二本松での展示を見てからわずか 2 か月で、巡回展の企画、スケジュール、予算措置、搬出入の段取りが確定し、2021 年 9 月からの巡回展スタートとなったのでした。

今回の巡回展では、たくさんのメディアに取り上げていただき、来館されなかった関西の方にも福島の今に思いを馳せてもらえたのではないでしょうか。避難先小学校の卒業生たちが大人になったら、巡回展として発展したことを同窓会でどう振り返るのかを聞いてみたいです。

高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）
主任学芸員　高田みちよ

「１０年間ふるさとなみえ博物館」巡回展　報告

「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会　趣意書

各館からの報告

① 高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）

2021 年 9 月 18 日（土）～10 月 17 日（日）

② 龍谷大学　瀬田学舎

10 月 25 日（月）～11 月 6 日（日）

③ 大東市立歴史民俗資料館

11 月 22 日（日）～12 月 5 日（日）

④ 滋賀県平和祈念館

2022 年 1 月 12 日（水）～2 月 13 日（日）【前半】

3 月 10 日（木）～4 月 10 日（日）【後半　パネル展示のみ】

⑤ きしわだ自然資料館

3 月 1 日（火）～3 月 27 日（日）

⑥ 伊丹市昆虫館

5 月 25 日（水）～6 月 27 日（月）

令和 3 年 8 月 5 日

「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会　趣意書

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故により、福島県浪江町が全町避難となり、二本松市立旧下川崎小学校の校舎を借りて、浪江町立避難再開小学校を開校してきました。令和 3 年 3 月で、この小学校は最後の児童が卒業をし、その役目を終えることとなりました。この避難先再開小学校を閉じるにあたり、10 年間行ってきた郷土学習「ふるさとなみえ科」の成果をまとめ、「10 年間ふるさとなみえ博物館」として展示されました。

本実行委員会では、この「10 年間ふるさとなみえ博物館」を関西圏で巡回展示することで、子ども達にとっての郷土とは、郷土教育とは、を改めて考えなおし、地元関西を再考するきっかけづくりとして活用したいと考えております。

「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会

伊丹市昆虫館

きしわだ自然資料館

滋賀県平和祈念館

大東市立歴史民俗資料館

高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）

特定非営利活動法人　西日本自然史系博物館ネットワーク

認定特定非営利活動法人　大阪自然史センター

龍谷大学理工学部博物館学芸員課程

結 Creation

「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会
事務局　高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）
高田みちよ、北村美香
Tel:072-692-5041
FAX:072-692-7864
E-mail:takada@aquapia.net

① 高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）

【概要】

施設名		高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）
展示タイトル		企画展「ふるさとを 守る、学ぶ、記録する 『10 年間ふるさとなみえ博物館』巡回展」
展示期間		2021 年 9 月 18 日（土）～10 月 17 日（日）（30 日間）
主催・共催・協力		【主催】高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川） 【共催】「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会 【協力】浪江町教育委員会、ライフミュージアムネットワーク実行委員会、静岡県地震防災センター、関西大学社会安全学部城下研究室、大阪府茨木土木事務所
展示内容　キーワード		①郷土教育、②防災教育、③防災対策
担当者		高田みちよ、北村美香
入場者数		6063 人 （特別展示室のみのカウントはできないので、期間中の館全体の入館者）
内容		別添　プレスリリースを参照
関連事業	タイトル	【企画展関連イベント】やってみよう防災学習
	内容	『災害対応ゲーム クロスロード』 『避難所運営ゲーム HUG（ハグ)』をあくあぴあのスタッフと一緒にやってみる。 市内の学校の防災学習で使用されたゲームです。
	参加人数	5 人（＋スタッフ 3 人）
報道記録		NHK 関西ラジオワイド（10 月 7 日） 福島民報（10 月 9 日） 朝日新聞（10 月 20 日の朝刊） 福島民報社説（10 月 22 日）
その他		

【展示風景】

プレスリリース

令和 3 年 9 月 18 日

高槻市立自然博物館 あくあぴあ芥川
〒569-1042　大阪府高槻市南平台 5 丁目 59 番 1 号
TEL:072-692-5041　FAX:072-692-7864
（担当：高田）

企画展「ふるさとを 守る、学ぶ、記録する
『10 年間ふるさとなみえ博物館』巡回展」を開催します

【開催期間：令和 3 年 9 月 18 日（土）～　10 月 17 日（日)】

いつ起こるかわからない地震などの災害に備え、食料などの備蓄をしておくことも大切ですが、災害時にどう行動するのかという、心の準備も大切です。自分の暮らしている地域の地形、歴史、文化など、地域のことを知ることも防災や復興につながる心の準備です。

東日本大震災での原子力発電所事故で全町避難を余儀なくされた、福島県浪江町の避難先再開小学校での地域学習「ふるさとなみえ科」の成果発表展示「10 年間ふるさとなみえ博物館」も合わせて展示します。

●見どころ展示紹介

【プレートによる地震】

地球を覆うプレートが動くことで地震が起きます。日本は大陸プレートの端にあり、東側から海洋プレートが沈みます。大陸プレートは海洋プレートに引きずられてたわんでいき、限界がくると元に戻ります。この時に大地震が起こります。この現象を模型で再現しました。ハンドルを回すと海洋プレートが沈みこみ、大陸プレートが曲がっていきます。もとに戻るときに住宅街に地震が起こります。

【防災学習をやってみよう】

防災には日ごろから心構えと訓練が必要です。ここでは、災害図上訓練「DIG」、避難所運営ゲーム「HUG」、災害対応ゲーム「クロスロード」を紹介しています。詳しい説明は QR コードでそれぞれの開発者ページにとべるようになっています。クロスロードは、高槻市立第七中学校で関西大学社会安全学部城下研究室の協力のもと、防災学習として取り入れられています。

10 月 9 日の「企画展関連イベント　やってみよう防災学習」で、スタッフと一緒に実際にゲームに挑戦しました。

【地域を知ろう】

地域の特性を知ることも防災になります。防災のために行われている事業ではありませんが、高槻市には地元発見のさまざまなアイテムがあります。市内のええとこを紹介する「ええとこブック」、小学校の副読本「わたしたちの高槻・大阪」、ミニコミ紙、パンフレットなど、知らなかった地元の再発見につながります。市内には 600 を超える公園、児童遊園があります。あなたの家の近くには、どんな公園がありますか？

【自主防災】

防災のため、日ごろからどんなことに気を付けなければならないか、災害発生時に何をすればいいのか、をパネルで紹介しています。

【「10 年間ふるさとなみえ博物館」を見る前に・・・浪江町ってどんなとこ？】

福島県浪江町は東日本大震災および、福島第一原子力発電所事故により、全町避難となりました。避難先の福島県二本松市の小学校校舎を借りて、浪江町立避難先再開小学校を開校していましたが、2021 年 3 月に最後の児童が卒業し、その役割を終えました。最後の年、10 年間つづけてきた郷土学習「ふるさとなみえ科」の成果を 1 年かけて丁寧にまとめ、丁寧に残すことを決め、2021 年 3 月に企画展「10 年間ふるさとなみえ博物館」が開催されました。この背景となる災害のこと、浪江町の現状についてを、パネル、パンフレット等で解説しました。

【10 年間ふるさとなみえ博物館】

2021 年 3 月に福島県二本松市の浪江町立避難先再開小学校で開催された企画展「10 年間ふるさとなみえ博物館」を、まるごと浪江町から借用しました。この展示は、2021 年 3 月に同校を卒業した最後の児童である、須藤嘉人くんを館長とし、先生やみんなでつくった 10 年間の「ふるさとなみえ科」を紹介する企画展です。当館の展示スペースの関係で、一部の展示は借用できませんでしたが、嘉人くんたちが一生懸命作った展示を高槻のみなさんにも紹介します。

*看板

博物館の名前を考え、看板を作成。文字は大堀相馬焼協同組合に協力していただき、みんなで焼いて作成しました。板や金具は、二本松家具の鈴木木工所に協力していただき、完成させることができました。校長先生が、文字がはめ込めるように板を削り、文字を接着しています。

＊博物館の使命、館長挨拶

「10 年間ふるさとなみえ博物館」の初代館長 須藤嘉人くんのご挨拶。博物館の展示作成当時、須藤館長は津島小学校の 6 年生でした。

＊10 年間の学びの年表

2019 年度に在籍した 2 名で作成。開校当時からの「ふるさとなみえ科」の 10 年間の学びが分かります。先輩たちの学んできたことを引き継いできたこと、いろいろなことを教わったことなどが、作った 2 人に伝わりました。

＊壁新聞

ふるさと浪江町に長く続くお祭りや工芸品、食文化について調べ、インタビューした成果をまとめ、新聞を作ってきました。先輩たちが作ったたくさんの新聞の中で、嘉人くんが選んだものが展示してあります。

＊「んだげんちょ」

「んだげんちょ」は浪江町の方言で、「そうなんだけど」の意味。浪江の町の思い出や名物を、方言を使って歌詞にちりばめたレゲエの歌「んだげんちょ」は、子どもから大人まで楽しめる「んだげんちょダンス」や「ダンベル体操」として発展しました。あくあぴあの展示では、YouTube の「なみえチャンネル」の歌が聞けます。

＊大堀相馬焼

350 年以上続く大堀相馬焼は、ひびの入ったような模様の「青ひび」、馬の絵の「走りごま」、熱いお湯を入れても持つことができる「二重焼き」が特徴です。二本松市での開校当時から、大堀相馬焼協同組合の方に教えていただき、作品を作ってきました。

***なみえ焼きそば**

浪江町の安くておいしい、昔から親しまれる極太麺の『なみえ焼そば』。約 50 年前、労働者のために食べ応えと腹持ちをよくするために考案されたとされています。

2008 年 11 月に浪江町商工会青年部が中心となって『浪江焼麺太国』という『なみえ焼そば』を媒体にする町おこし団体を設立。ナポレオンを意識していて、頭の上にやきそばが乗っている特徴的なファッションの「やきそば太王」を中心に部下の愉快な仲間達「レギュラー麺バー」と広報活動を開始しています。

***なみえっ子カルタと学び直し**

二本松市での避難先再開小学校が開校したころからカルタづくりを行ってきました。浪江町の思い出をカルタにし、「あ」～「ん」までを整理して、「なみえっ子カルタ」として完成させました。2020 年、嘉人くんは先輩たちがつくったカルタの場所を訪れ、今そこがどうなっているのかを地図にまとめました。

●展示点数

解説パネル 57 点、写真 37 点、防災グッズ 2 セット、体験コーナー1 種類、動画 1 点、音楽 1 点、食器 21 点、冊子 11 冊、壁新聞 9 種、看板 1 点、衣類 4 点、カルタ 31 点

【主催】高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）

【共催】「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会

【委員会構成メンバー】

特定非営利活動法人 西日本自然史系博物館ネットワーク、伊丹市昆虫館、きしわだ自然資料館、滋賀県平和祈念館、大東市立歴史民俗資料館、高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）、認定特定非営利活動法人大阪自然史センター、龍谷大学理工学部博物館学芸員課程、結 Creation

【協力】浪江町教育委員会、ライフミュージアムネットワーク実行委員会、静岡県地震防災センター、関西大学社会安全学部城下研究室、大阪府茨木土木事務所

【企画展関連イベント】やってみよう防災学習

『災害対応ゲーム　クロスロード』　『避難所運営ゲーム　HUG（ハグ）』

市内の学校の防災学習で使用されたゲームです。

あくあぴあのスタッフと一緒にやってみましょう。

日時：2021 年 10 月 9 日（土）

【１回目】10：30～12：00

【２回目】13：30～15：00

場所：あくあぴあ１階　企画展コーナー

対象：どなたでも（ゲームは小学生以上を対象に作られていますが、小さな子どもも大人と一緒に参加できます）

≪高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）基本情報≫

○名称　高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）

（平成 27 年 4 月 1 日より名称変更しました）

○開館時間　10:00～17:00

○入館料　無料

○休館日　毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館）

○駐車場　芥川緑地駐車場　８:００～１８:３０（６月～９月は１９:３０まで）

１時間１００円（１日最大４００円）

○交通　電車 JR 高槻駅 北５番のりば「関西大学」「平安女学院東」行き

乗車約１５分「南平台小学校前」下車すぐ

○所在地　〒569-1042　大阪府高槻市南平台 5-59-1

○電話 072-692-5041

○FAX　072-692-7864

○HP　http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/kanko/aquapia.html

○ブログ　https://aquapia-akutagawa.blog.jp/

○E-mail　info@aquapia.net

○指定管理者　あくあぴあ芥川共同活動体

（NPO 法人芥川倶楽部、認定特定非営利活動法人大阪自然史センター）

② 龍谷大学　瀬田学舎

【概要】

施設名		龍谷大学瀬田学舎
展示タイトル		『巡回展』10 年間ふるさとなみえ博物館「福島」に思いを寄せて～龍谷大学と福島の関わり～
展示期間		2021 年 10 月 25 日（月）～11 月 6 日（土）（12 日間）
主催・共催・協力		【主催】龍谷大学理工学部博物館学芸員課程 【共催】「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展実行委員会 【協力】浪江町教育委員会、ライフミュージアムネットワーク実行委員会、龍谷大学社会学部築地研究室、龍谷大学先端理工学部
展示内容　キーワード		①郷土教育、②教育成果の還元、③ESD
担当者		横田岳人
入場者数		169 人（期間中の展示スペース利用者数）
内容		別添
関連事業	その 1	福島震災復興に関わる龍谷大学の取り組み紹介
	内容	先端理工学部環境生態工学課程教員が取り組む放射線汚染土壌の除染についての取り組み、社会学部築地研究室が取り組んできた福島との連携、NPO ボランティア活動センターが東北震災復興に取り組んできた福島県内での取り組みの紹介などを紹介する。
	その 2	龍谷大学理工学部博物館実習企画展「狸 TA・NU・KI～龍谷の森といっしょに！～」（博物館学芸員課程の紹介とその取り組み）
	内容	キャンパスに隣接する「龍谷の森」とそこに住む生き物について、タヌキを中心に剥製標本やジオラマ、説明ボード展示を組み合わせて紹介した。
報道記録		中日新聞 2021 年 10 月 31 日朝刊・びわこ版 読売新聞 2021 年 10 月 31 日朝刊・地域面（滋賀） びわ湖放送 2021 年 10 月 31 日 18 時のニュース（約 90 秒） 東京新聞 2021 年 11 月 4 日朝刊・特報面 京都新聞 2021 年 11 月 4 日朝刊・地域面（滋賀） 毎日新聞 2021 年 11 月 4 日朝刊・地域面（滋賀） 朝日新聞 2021 年 11 月 4 日朝刊・地方面（滋賀）
その他		①巡回展前日の 2021 年 10 月 24 日に報道関係者を招いて内覧会を実施した。中日新聞、京都新聞、読売新聞の 3 社が参加。二本松で開催時の再開小学校校長の木村先生と福島県立博物館の小林さんにもオンラインで参加いただき、「10 年間ふるさとなみえ博物館」にまつわる思いを語っていただいた。 ②巡回展終了後の 11 月 7 日に大学で催された REC30 周年記念シンポジウムに来場された来賓の方々（龍谷大学入澤崇学長、環境省中井徳太郎事務次官）にも「10 年間ふるさとなみえ博物館」を見ていただいた。

【展示風景・「10 年間ふるさとなみえ博物館」】

【展示風景・関連展示】

【展示内容】

本展示では、本体展示である「10 年間ふるさとなみえ博物館」と関連展示である「福島震災復興に関わる龍谷大学の取り組み紹介」「理工学部博物館実習企画展」の 3 つの構成に分けて展示しました。

本体展示では、2021 年 2 月から 3 月に福島県二本松市旧下川崎小学校校舎で開催された「10 年間ふるさとなみえ博物館」の展示を可能な限り忠実に再現するように試み、巡回展示用に関西に搬入された展示資料を全て展示することとしました。

龍谷大学の学生・教職員の多くは東北地方にあまり馴染みがないことから、福島県の地勢や首都圏との位置関係・経済的な結びつきについてパネル展示を用いて解説を行いました。また、浪江町と避難先再開小学校が開かれた二本松市の位置関係や再開小学校の経緯も簡単にパネル展示で紹介しました。避難の発端とな

った東日本大震災や福島第一原子力発電所の事故については事実の経緯に触れるのみとし、再開小学校での「ふるさとなみえ科」の取り組みを紹介することに注力しました。

「10 年間ふるさとなみえ博物館」の展示は、「10 年間ふるさとなみえ大事典」に記された博物館図録にしたがって、前期、中期、後期の取り組みに区分けしながら展示物を配置しました。「未来の浪江町模型」は展示物のサイズが大きく関西に搬入されていないため、写真をジオラマ風に配置するなどして、子ども達が構想した未来の浪江町の姿が分かるように工夫しました。ふるさとなみえ科の授業での成果物である壁新聞「なみえ新聞」や「なみえっ子カルタ」、「大堀相馬焼」は児童一人一人の学びの後が分かるように展示しました。特に「なみえっ子カルタ」はその後も学び直しにも繋がっているため、可能な限り絵札と読み札をセットで展示しています。

児童が取り組んできた「浪江焼麺太国こども大使」や「んだげんちょ」、「なみえっ子みこし」「城家箪笥」関連の品々は、「10 年間ふるさとなみえ大事典」の記述を元にした解説パネルを添えて展示しましたが、実際には来場者の求めに応じて会場担当者が来場者に説明を行うこともしばしばありました。

最後に交流のまとめや年表を作成し、「10 年間ふるさとなみえ博物館」を開館して再開小学校の 10 年間の歩みが閉じられることになるのですが、「ふるさとなみえ科」の学びの履歴の再確認と学び直しから始まる新たな学びの取り組みが分かるように配置して展示しました。交流年表には滋賀県内の交流団体が 2 つ含まれており（近江公民館、松本製菓舗)、滋賀県との繋がりを感じさせるものとなりました。

関連展示である「福島震災復興に関わる龍谷大学の取り組み紹介」では、先端理工学部環境生態工学課程の水原先生と奥田先生による「災害廃棄物に係るボランティア活動の現況調査」「磁力選別を用いた土壌中セシウムの分離技術の開発」の 2 題のポスターの他、「フクシマに学ぶ」と題した社会学部コミュニティマネジメント学科の実践的広報プロジェクトの成果報告、龍谷大学 NPO ボランティア活動センターの福島県内での取り組みの紹介を、それぞれポスター展示しました。

また、「理工学部博物館実習企画展」では、「狸 TA・NU・KI～龍谷の森といっしょに！～」（博物館学芸員課程の紹介とその取り組み）と題して、龍谷大学瀬田キャンパスに隣接する「龍谷の森」とそこに住む生き物について、タヌキを中心に剥製標本やジオラマ、説明ボード展示を組み合わせて紹介しました。なおこの展示は、同年 8 月に実施された大学のオープンキャンパスに合わせて準備した物をアレンジしたものです。

「10 年間ふるさとなみえ博物館」来場者アンケート

会期中に回収した来場者アンケートの結果の一部を報告します。

・回収枚数：104 枚

・回収率：61.5%（回収枚数104 枚/来場者数169 名）

・性別：女性48 名、男性56 名

・年代別：10 代3 名、20 代27 名、30 代 8 名、40 代14 名、50 代22 名、60 代15 名、70 代10 名、80 代以上 4 名

1．「特に印象に残った展示があれば教えて下さい」の質問に対して回答していただいた中から、印象に残った展示として挙げられていた展示と、それに対してのコメント内容を展示物ごとにまとめたものを以下に記します。

［なみえっ子カルタ］

・かるたの言葉や絵を描いた気持ちを思うと胸が熱くなります（40 代男性）
・なみえっ子カルタは、自分たちのことばで短いけど（今の時代にも合っている）ふるさとへの想いを伝えられるいい取組だと思いました!!（50 代女性）
・子どもさんたちの手書きが心に響きました（60 代女性）
・ふる里なみえを記憶している子ども、小さくて覚えていない子ども、皆でカルタを作り、避難している大人達もいっしょに楽しんだ。楽しめたことだろう、うれしかっただろうと感銘を受けました。（70 代女性）
・子どもたちのなみえに対する思いがいっぱいつまった宝物のようなものだと思います（30 代男性）
・子どもたち一人ひとりが自分たちが過ごした町を愛していく過程がよくわかる作品でした（60代男性）
・子供たちのふる里への思いが短い文章に表現されていました（50 代男性）
・小学生が自分の思い思いの文とかるたをつくり、浪江町の文化、歴史に触れていた。「アルバムを見たら神社に行ったことを思い出した」など、製作したからこそ思い出せるものもあり、良かったと思う。（20 代男性）
・地元の子どもたちの思い出や、知ってもらいたい浪江の魅力が想像をかきたてる絵とともに紹介されていた（20 代男性）
・「なみえ」の記憶がない生徒がカルタをたどって自分の記憶をつくっていった記録がとても印象的（20 代女性）※おそらく嘉人くんが先輩のカルタ巡りをしたもの
・地元の思いが伝わるので（50 代男性）
・小学生が創意を生かして自分の身近の街を観察し作るという活動は、何重の意味でも重要な活動です（80 代以上男性）
・故郷の思い出を子供達と一緒に振り返る事ができる良い物だと感じた。（20 代男性）
・idea も良いし、カラフルで楽しい（40 代男性）
・こどもたちが一生懸命考え、作った様子が思い浮かぶようです（50 代女性）
・子ども達の浪江への思いが詰まったカルタ。感動しました。（50 代男性）
・なみえっ子カルタがとてもすばらしかったです！浪江町の伝統や請戸漁港の砂浜など、目の前にうかぶように楽しく拝見しました。（20 代女性）
・子どもからの心のメッセージが感じられて良かったです。（60 代女性）
・子どもたちががんばってつくってくれていて、子ども目線でみたなみえが表現されていて、なみえの初心者の私でも伝わりやすかった（わかりやすかった）です。（20 代女性）
・全国的に広まったら良いと思います。（80 代以上女性）
・ふるさとへの思いが伝わってきました。（50 代男性）
・私も地域のカルタ作りの経験があるので楽しく拝見しました。（80 代以上男性）
・子どもたちが自分の町をいつまでも忘れず、心に留めておきたいという思いが存分に伝わってきました。（50 代男性）

・「三匹獅子 津島にひびく 太鼓の音」が心に響きました。（60 代男性）
・かるたや新聞に書かれている絵が皆笑っている絵で、エネルギーを感じました。（40 代男性）
・とてもかわいかったです!!（30 代女性）

［なみえ新聞］
・展示のために作られたのではなく、１つ１つが何かを伝えようとするような濃い内容だったのが印象的でした（20 代女性）
・十日市祭年表と食の新聞が伝統や文化を知ることが出来る物でした（30 代男性）
・手書きの字や絵、感想が一生懸命伝統文化を伝えようとしているのが分かって、工夫もたくさんあって面白かったです（10 代女性）
・ふるさとへの思いが伝わってきました。（50 代男性）
・子ども達の笑顔で頑張っている姿が素敵でした。「浪江町の十日市祭」（50 代女性）
・まちの人と交流し、ふるさとを知り、文章に自分たちの想い、ふるさとの想いが込められていて印象的（20 代女性）
・かるたや新聞に書かれている絵が皆笑っている絵で、エネルギーを感じました。（40 代男性）
・浪江の紅葉汁新聞と二本松のざくざく新聞はほんとうに楽しく、食べてみたくなりました。（50 代女性）

［年表・交流］
・温かみのある印象に残る作品でした（40 代男性）
・たくさんの方々が関わっていることがわかった（40 代女性）
・交流の歴史年表がきちんと整理されているのが印象的でした。学校での交流活動をとても大切に思われてきたのが、よく分かりました。（60 代男性）

［んだげんちょ］
・レゲエの音楽が様々な活動に広がっていたのが印象的でした（30 代男性）
・雰囲気を感じやすかった。見る物が多い中、聴くものだったので特に印象に残った（20 代女性）
・んだげんちょの歌詞が独特で、方言を聞きとる難しさを改めて体感した（20 代男性）

［なみえっ子みこし］
・展示物が最初にあると目を引くのでよいと思った（女性）
・地域の復興のシンボルとして皆様の気持ちが伝わります。（70 代女性）

［大堀相馬焼］
・相馬焼等の伝統を今後どのように守って行くのか、大変と思います（60 代男性）
・これ（嘉人くんが作った大堀相馬焼の皿でオバQ のような顔をしたもの）がかわいかった
・被害の大きかった浪江町から相馬に移り、気持ちよく迎えてもらって習得した陶芸技術を実践した小学生の思いが伝わる。（70 代男性）

［看板］

・地域の人と子どもたちの思いが詰まっているような気がしました（40 代女性）

［未来の浪江町の模型］

・どんな想いで作業をしたのか、胸にひびきました。（70 代女性）

［その他］

・小学生の子が作ってくれた物を見たことで、自分の当時の事を思い出したり、自分の違う場所で何があったかを知ったりできたので、どの展示も良かったです（20 代男性）
・ひとつひとつに思いが詰まっているのが感じられました。（40 代女性）
・さまざまな学びの表現はどれも心を打たれました。（50 代女性）
・全体を見て大いに心動きました。一つ一つの展示品に生徒の思いがしっかりつまっていました。（60 代男性）

2．「特に印象に残った展示があれば教えて下さい」及び「浪江町、福島へのメッセージや感想を自由にお書き下さい」の回答の内容から紹介します。

・子どもならではの言葉や素直な感想がおもしろくもあり、真っ直ぐ取り組んできた様子がうかがえました。テレビや新聞だけでは分からなかったことを、地元の方の目線で知ることができて良かったです。（20 代男性）
・祭、伝統文化、食、ものづくりの様々な面から自分たちの生誕地のことを学び通して「ふるさと」の良さ、魅力を知るとても素敵な資料プログラムでしたね。子供たちにとって忘れることのできない学びになったことと思います。（50 代男性）
・全体として、現物をたくさんもってきてあったのが良かったです。解説をお聞きすることができたので理解を深めることができたと思います（50 代女性）
・子どもたちの総学的学習のカリキュラムと成果物：地域の人とともに学ぶ総学は、これらの学習指導要領の理念そのものになっていると思いました（60 代男性）
・浪江町小学生のふるさとを想う気持ちが伝わってくる。浪江町の食物や伝統・産業を初めて知ったが、さて大萱は？当地の歴史・文化をもっともっと掘りさげてゆきたい。（70 代男性）
・記録を残すことの大切さを感じます。後から思い出せる。（50 代男性）

以上

「10年間ふるさとなみえ博物館」来場者からの聞き取り

来場者アンケートには反映されていませんが、来場者が受付担当者や展示担当者と交わした会話から生の声を集めたものを報告します。

学外・男性　震災当時仙台市在住。被災したため、今回の展示は感慨深い。震災のことをいろいろと思い出した。

学内・男性 これだけの資料を運んできたことに驚いた。博物館学芸員課程の学生さんの良い学びになったし、学芸員の仕事の幅広さ（美術や考古だけでない）も初めて知った。なかなか取り戻せない日常という意味で、コロナ禍の今と重なるところがあった。2 年でも厳しいのに、それが 10 年続いている生活があることに思いを馳せた。何気ない日常の大切さを感じ直した。浪江の非日常は人災であることをもっと認識してもらいたいと感じた。

学外・男性　震災当時は郡山在住。避難者を受け入れるのに奔走した日々を思い出す。仕事で転勤して滋賀に来ているが、避難者のことを思い出す良い機会をいただいた。感謝。

学外・男性　北海道で被災したことを思い出す。自分の息子が現在中学 1 年。須藤くんと同い年かと思うと、須藤くんは震災で鍛えられたのだと思う。すごい。

学内・男性　学内での取り組みは嬉しい。学生たちが刺激を受けてくれることを期待する。地域の方々に広く知って欲しい（被災地のこと、大学の取り組みのこと）

学内・男性　震災のこと、風化している。思い出す機会が嬉しい。

学内・女性　東北地方に行ったことはなく、浪江の場所も知らない。前職（県庁）時代に震災復興の福島県の担当県が滋賀県だったので、多くの同僚を送り出し、出張手続きを整えていたので、県が行った復興の一端を知れたような気がする。震災のことはニュースで報じられるときに関心を持つけれども、すぐに忘れてしまう。震災のことが風化してしまっていると感じている。でも、自分で思い入れをもって（関心を持って）見つめる場所があれば、風化せずに思い続けることができるのではないかと感じた。今回の展示をきっかけに、浪江町のことをもっと知りたいと思った。

学内・女性 福島の友人から、関西で巡回展があると聞き、龍大でもやったら良いのに....と言われていたので、龍大で展示を見られて嬉しい。震災時にボランティア活動で震災地域を巡っていたことを思い出す。展示物一つ一つを読みながら、ボランティアで交流した一人一人を思い出し、またボランティアで活躍した学生さんのことも思い出す。物があることで、普段は意識しない事柄を思い出し、また次から次へと思い出が続く。人と人のつながりを改めて感じる展示だった。

学外・女性　博物館の標本レスキューの兵站部隊（お食事作り）で東北地方を回った。岩手や宮城中心だったけど、被災地を見てきた。震災直後は子どもたちが瓦礫の中で遊んで生傷だらけだったので、子どもたちと一緒に遊びながら怪我しないように工夫した。博物館のワークショップをお手伝いした縁で定期的に被災地に通うことになり、年ごとに復興？変化する様子を見てきた。街だけでなく、子どもたちの力強い想いを感じる展示だった。

学内・男性　素晴らしい取り組み。学校現場で取り組まれた内容を、10 年、20 年と積み上げて欲しい。箱物を作るのは簡単だけれどもそれを維持するのが難しい。展示物を見ると、その当時に引き戻されて、その時代の話に戻ってしまう。その体験を思い出に終わらすのではなく、次へ次へと伝えて欲しい。伝承には

伝承の難しさがあるが、伝え続けなければ風化するのみ。須藤くんはじめ、地域でふるさとを見つめた小学生達が、将来的にネットワークを作って励まし合い、福島を担っていってくれることを期待している。

学内・男性　子ども達の展示に驚いた。一つ一つのこだわりがすごい。地元のことを学ぶのに、食を取り上げているのが良いと感じた。地域で採れた食材を用いて地元の食が形成されるので、地域の恵みを感じる場として食は貴重と思う。学校が閉鎖してしまっても、地域の子どもが学ぶ場で、ざくざく等の食を提供してあげて欲しい。祭りの時に振る舞われたように、地元の子ども達が食を通じて地域を感じ、記憶して欲しい。避難先の人々への感謝が伝わる展示でした。震災や原発事故の結果だが、そのようなことに関係なく、どの地域でも実践して欲しい学びが詰まっていました。

学外・男性　なみえやきそば（オレンジ色）のＴシャツを売ったらええやん（提案)。福島への支援になる。

学外・女性　アルバイト先の県立美術館でチラシを見て来場。もっと積極的に紹介したら良いのでは？　震災当時は海外にいたので、震災の被害やその後の話は聞くだけだった。展示を見て身近に感じることができた。

学外・女性　金曜日に知人から聞いて、急いで飛んできた。学校の先生に見てほしい展示。もっと宣伝してほしい。福島のことは関心を持っていたが、土地勘はなく、環境省主催の教員向け現地見学会の抽選に外れたところだったので、少しでも福島を知れる展示が開かれていると知って来た。多くの人の交流の中で子ども達が育まれているのを感じた。交流を大切にしたい。

学外・男性　北海道で震災に遭ったが、震災の頃を思い出す。当時小学校 3 年生。4 年生の 2 学期の始めに、福島から避難している人が転校生でやってきた。学校を転々としている人たちと、今回の展示のように地域を定めて学んだ子たちがあるのを知った。地元の新聞を通じて、二本松だけでなく福島全体で温かく見守られていたのを感じた。

学外・夫婦　本日、読売新聞で見て来た。県美でチラシを手に取った。忘れかけていたことを思い出させてもらいました。友人がボランティアで福島に行っていたので、話は少し聞いていました。

学内・男性　総合的学習に「ふるさとなみえ科」のように名前を付ける方法は、現在の学習指導要領に取り入れられた内容の先取り。何でもありの科目ではなく、系統的に学習できるように工夫されているのがすばらしい。他の地域の先生たちにも見て学んでいただく良い展示物だと思う。

学外・男性　すばらしい展示。地域を大切に子どもたちに伝えようとする教職員の方々の努力があふれている内容に感動した。非常に良い学びの機会を子どもたちに与えている。子どもたちが手を動かしながら地域を学んでおり、一人一人の心に刻まれる体験となったことだろう。関西だけの巡回展ではもったいない。関東でも実施できないだろうか？震災の記憶が薄れる中、震災を記録する活動を支えることにならないだろうか？二本松での博物館作りに尽力下さった方、関西の巡回展に関わられた一人一人に感謝したい。

学外・男性　震災には実感がなく、このような展示を見ることでイメージを膨らませる。地域の文化をどのように伝えていくか、新住民が増えて旧住民との接点が失われている中で、今回の展示は考えさせられることが多かった。地域で災害が起こったときに、浪江のようにまとまれるのだろうか？自問している。日頃からサポート体制をつくっておかないと、いざというときに機能しない。自分たちは大丈夫か？

学外・女性　郷土学習の凄さに圧倒される。小学校の教員だったときに、郷土学習の必要性を認識しつつも、学校行事の問題や、生徒達の流動性の高さの問題、郷土を伝えられる地域の人の相対的な割合の低さ、学習を受ける児童数の多さ、といった様々な理由から、十分な郷土学習が行えなかった反省がある。学校だけでなく地域を中心とした多くの支えがあって、充実した郷土学習が行えているのがすばらしい。郷土を

見失う時期の子ども達に郷土を覚えてもらおうとする大人達の熱意も感じる。このような学習プランを創り上げられた先生方にありがとうと言いたい。

学外・女性　郷土学習の濃密さに驚かされた。自分の子ども達を見ていると郷土学習を疎かにされていると感じるので、浪江の子ども達の濃密な学習をうらやましく思う。大人達の支援が充実してることもあるけれど、全国の子ども達も同様に学べる機会を作ってほしいし作ってあげたい。見れば見るほど、聞けば聞くほど、充実した学びであったのだと思わされる。こういった学習の成果を「博物館」としてまとめ上げたのもすばらしい。モノが語りかけてくる迫力は、博物館として展示していただいたことの成果だと思う。関西の次の巡回展は何処ですか？もっといろんな地域でこれらの展示を見て感じる機会を作ってほしい。

学外・女性　このようなすてきな展示をもっと宣伝してほしい。県内でも何カ所かで企画してもらえるとありがたい。大学構内はちょっと入りにくい。近くの美術館とか、びわ湖ホールとかで展示してもらえると、もっと一般のお客さんも来てくれるのでは？多くの人に見てほしい。

学外・女性　丁寧な学びをまとめた展示でした。このようにふるさとを考える機会を得て、感謝しています。

学外・男性　充実した展示でした。博物館の特別展としても成立するほどの十分な内容を持っていると感じました。

学外・女性　一人の児童に熱心に多くの教職員が関わって学びの場を提供したことをうれしく思います。その多くの教職員の期待を受け止めた最後の卒業生、須藤くんはしっかりしていると感心しました。強い子に育ってくれるでしょう。

学外・男性 先生方がしっかりしていたんだなぁと感じる展示だった。子どもたちに手厚く教育するのは大切。ふるさとを失って分かる悲しみもある。ふるさとを作る喜びもある。子どもたちにふるさとを忘れるな、生まれ故郷の素晴らしさを伝え続けたい。震災は自分たちにいつ降りかかるか分からない事柄。水害になるかも知れない。ふるさとの大切さを改めて感じた。

学内・女性　すごく本格的な展示で驚いた。"凄い"の一言。言葉にならない。

学外・女性　二本松での展示は年度末で忙しく、また地域の緊急事態宣言が発令されたため県外へ出ることができずに見に行けなかった。今回、楽しみに来場した。可能な限りの資料を持って来ていただいて展示していただいたこと、資料１点１点の素晴らしさを味わうことができ、雰囲気もうかがい知れた。「博物館の使命」がしっかりと明文化され、自分たちの思いを伝えている様子は、学芸員として気持ちを新たにさせられた。今回の展示物をぜひ浪江町の中で観覧できる場を作って欲しいと願っている。震災後のなかなか支援できなかったもどかしさを感じながら、一つ一つの支援の中で、東北各地の博物館が復旧していく様子を思い出した。今回の熊本地震では支援の手が東北から延びてきていることに感謝している。

学外・女性 んだげんちょのダンスの時に着ていた馬の絵の入ったＴシャツは売れるのでは？乗馬クラブの人に福島支援で協力もらえると思う。母から連絡をもらい、見学に来た。阪神淡路をきっかけに、被災者の支援を積極的に行っていた。浪江から送られてくる子供たちの成長する姿を収録したDVDや写真が楽しみ。良い交流をいただいている。

学内・男性 "ふるさと"を改めて考え直す良い機会になった。なみえっ子カルタを用いた学び直しが良かった。自分自身も子どもの頃の思い出の場所を巡ってみたい。

学内・女性　小学校を指導した先生方の熱意と、本物を見せようとする努力にありがとうという思いを持つ。教育の中で様々な思いはあったと思うが、教育に徹し、児童へ伝えようという想いが、この郷土学習に、展示に現れていると感じた。

You, Unlimited

Ryukoku University

報道関係者各位

2021年10月20日
学校法人 龍谷大学

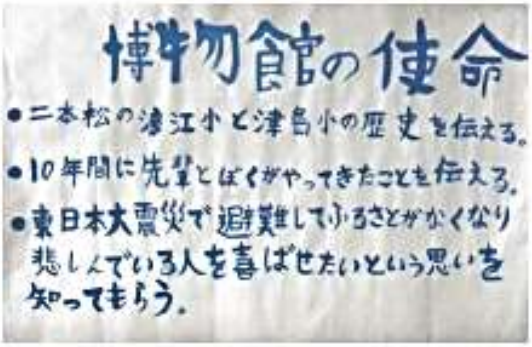
【マスコミ向け内覧会のご案内】

龍谷大学瀬田キャンパスで「10年間ふるさとなみえ博物館」避難先小学校、最後の卒業生が郷土学習の成果まとめる 原発事故で帰れぬ故郷への想いを表現

日　時：2021年10月24日（日） 14時00分～17時00分
会　場：龍谷大学瀬田キャンパスRECホール1階展示スペース
（大津市瀬田大江町横谷1-5）

2021年10月25日（月）～11月6日（土）、龍谷大学瀬田キャンパスで「10年間ふるさとなみえ博物館」巡回展を開催します。これに先駆けて、10月24日（日）にマスコミ向け内覧会を実施します。

「10年間ふるさとなみえ博物館」は、2011年3月11日に発生した福島第一原発事故の影響で遠隔地（同県二本松市）に全町避難せざるを得なかった福島県浪江町立津島小学校の避難先再開小学校の最後の児童となった須藤嘉人（すどう・よしと）さんが、同小学校で展開された10年間の郷土学習授業の成果を、たった一人でまとめたものです。



最後の卒業生・須藤嘉人さんが考え、二本松市での展示で掲出した「博物館の使命」の写真（2021年3月）

内覧会では、博物館開館準備に携わった浪江町立津島小学校元校長の木村裕之さん（現：相馬市立飯豊小学校長）と、展示指導に当たった福島県立博物館学芸員の小林めぐみさんがオンラインで参加される予定です。記者の皆さまにはオンラインインタビューの時間を設けます。

皆さまにおかれましては大変ご多用中とは存じますが、万障お繰り合わせの上、何卒ご参加賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

■ 発表主体の概要説明（※チラシ添付）

1．巡回展の開催日時　2021年10月25日（月）～11月6日（土）　10時～17時
※内覧会は24日（日）14:00～下の会場で開催します。
※オンラインインタビューは14:30～15:30を予定しています。
会場に直接お越しください。

2．会　場　龍谷大学瀬田キャンパスRECホール1階展示スペース
（大津市瀬田大江町横谷1-5）

3．主　催　龍谷大学理工学部博物館学芸員課程

4．共　催　「10年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会
【委員会構成メンバー】特定非営利活動法人西日本自然史系博物館ネットワーク、伊丹市昆虫館、きしわだ自然資料館、滋賀県平和祈念館、大東市立歴史民俗資料館、高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥

川）、認定特定非営利活動法人大阪自然史センター、龍谷大学理工学部博物館学芸員課程、結Creation

5．協　　力　　浪江町教育委員会、ライフミュージアムネットワーク実行委員会、龍谷大学社会学部「フクシマプロジェクト」、龍谷大学先端理工学部

※本学「理工学部」は2020年度に改組して「先端理工学部」となりました。「博物館学芸員課程」は現在まだ、旧理工学部に所属しています。このため、表記に揺れがございます。

■ ニュースの詳細

浪江町立津島小学校は、東日本大震災による福島第一原発事故の影響で全町避難せざるを得なかった浪江町の北西部にあり、同町立浪江小学校などとともに、避難先・二本松市にある旧二本松市立下川崎小学校の校舎を使用してきました。しかし、最後の児童となった須藤さん卒業に伴い、避難先小学校は今年3月末で休校となりました。津島地区は、某テレビ番組で有名な『福島DASH村』のあった場所として知られています。

避難先再開小学校では原発事故後、「子どもたちが浪江を忘れないように」という想いから、ふるさとの文化や伝統を学ぶ郷土学習「ふるさとなみえ科」が創設され、多くの子どもたちが本来のふるさとの浪江町と新しいふるさとともいえる二本松市について学んできました。

「10年間ふるさとなみえ博物館」は、先輩児童を含めて10年間にわたった学びの様子や成果物などを須藤さんがたった一人でまとめ、今年2月から3月にかけて二本松市の避難先小学校で開催されたものです。

今回、この「10年間ふるさとなみえ博物館」をまるごと浪江町から借用した巡回展が、関西の博物館学芸員ネットワークの企画で実現することとなりました。高槻市立自然博物館（9月18日から10月17日）での展示を皮切りにスタートしています。

龍谷大学瀬田キャンパスでは滋賀県内での第一弾として、10月25日（月）～11月6日（土）の期間、RECホール1階展示スペースで開催します。瀬田では、二本松市での展示の様子を可能な限りそのまま再現することにしています。

龍谷大学瀬田キャンパスでの開催にあたっては、理工学部博物館学芸員課程の学生が展示に関わる実務を手がけます。また、社会学部コミュニティマネジメント学科「フクシマプロジェクト」の学生が広報活動の分野でお手伝いしています。

滋賀県内では今回の瀬田での展示に続き、県立滋賀県平和祈念館（東近江市）でも以下の日程で巡回展が開催される予定です。

- 2022年1月12日（水）～2月13日（日）【前半】
- 同3月10日（水）～4月10日（日）【後半 パネル展示のみ】

■ ニュースの社会的背景、経緯

東日本大震災は、2011年3月11日14時46分頃に発生。最大震度7が観測され、岩手、宮城、福島県を中心とした太平洋沿岸部を巨大な津波が襲いました。

福島第一原子力発電所の冷却用非常電源が14～15mの津波の浸水によって機能を失ってしまったため、格納容器の破壊や水素爆発、放射性物質の放出という重大事故に至りました。この影響で約16万人が県内外に避難を余儀なくされました。現在も福島県全体で県内に7,000人、県外に28,000人が避難生活を続けています。

双葉郡浪江町は福島県浜通り北部にあり、福島第一原発が立地する双葉町に隣接しています。津島地区を含む町北西部の大半が帰還困難区域とされたままです。事故当時21,500人いた町民は全町避難によって全国に散り散りになりました。2017年3月には一部地域の避難指示が解除され居住可能となりましたが、浪江町によると、現在の住民登録者は16,400人となっていますが、実際に町内に戻ってきた人は1600人程度にとどまっている状況です。

問い合わせ先：龍谷大学社会学部コミュニティマネジメント学科「フクシマプロジェクト」
指導担当教員 築地達郎　Mail tsukiji@soc.ryukoku.ac.jp　Tel　090-9046-3542

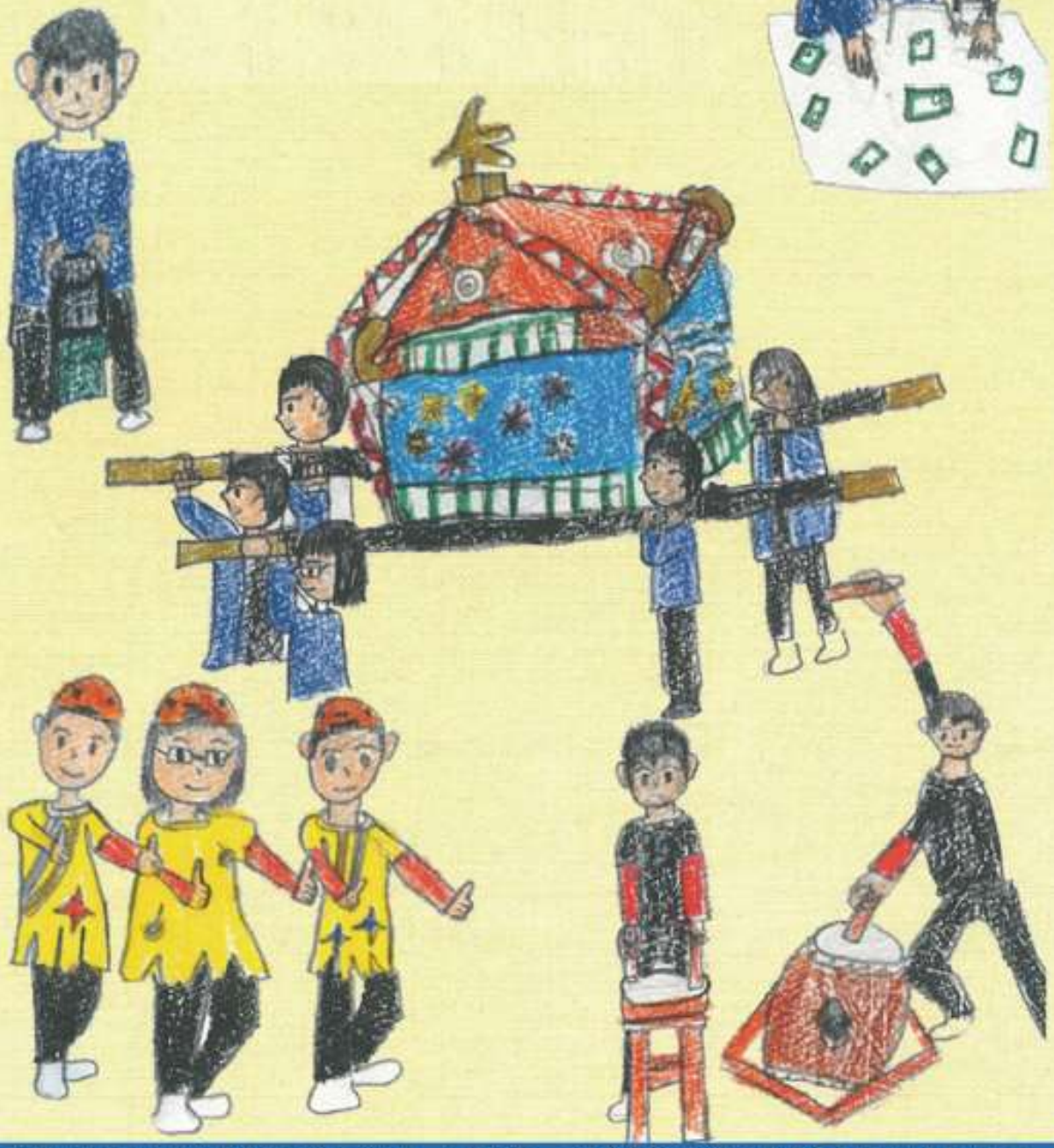
（配信先）京都大学記者クラブ、宗教記者クラブ、滋賀県政記者クラブ、滋賀県教育記者クラブ、大阪科学・大学記者クラブ

『巡回展』

10年間ふるさとなみえ博物館

「福島」に思いを寄せて～龍谷大学と福島の関わり～

開催日：2021年10月25日（月）～11月6日（土）
時　間：１０時～１７時
場　所：龍谷大学瀬田学舎REC棟１階展示スペース



新型コロナウィルス感染拡大防止のため、入館の際、マスク着用・検温・消毒をお願いしております。

『巡回展』

10年間ふるさとなみえ博物館

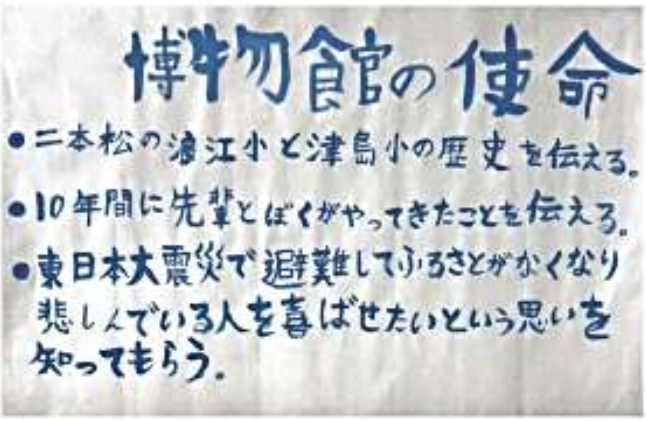
「福島」に思いを寄せて～龍谷大学と福島の関わり～

開催日：2021年10月25日（月）～11月6日（土）
時　間：10時～17時
場　所：龍谷大学瀬田学舎REC棟1階展示スペース

入館無料

「10年間ふるさとなみえ博物館」は、二本松市旧下川崎小学校校舎をお借りして避難先で開校していた津島小学校に、2020年度に開設された博物館です。避難先での地域学習として行った「ふるさとなみえ科」の10年間の歩みを、最後の一年にまとめ上げて開館しました。本来のふるさとである浪江町と新しいふるさとともいえる二本松市の両方を郷土学習として学び、二本松の方々に浪江町の取り組みを紹介する場となったこの博物館は、2021年3月に最後の卒業生が小学校を卒業し、小学校は閉校に、博物館も閉館になりました。

今回、閉館になった博物館資料をお借りして、近畿地方のいくつかの博物館施設で巡回展を実施することになり、龍谷大学でも実施することになりました。実際に博物館資料に触れて展示を再現する仕事に携わることや、原発事故による避難の現実を知っていただくことにも意味がありますが、優れた地域学習の成果を分かち合う貴重な機会となります。龍谷大学の学生だけでなく、地域の方々、特に学校関係の方々に足を運んでいただき、浪江のこどもたちの取り組みの成果を味わっていただければと思います。



【同時開催】

1. 福島震災復興に関わる龍谷大の取り組み紹介（汚染土壌の除染、復興支援など）
2. 龍谷大学理工学部博物館実習企画展「TA・NU・KI 狸 龍谷の森と一緒に!」（博物館学芸員課程の紹介とその取り組み）

【問い合わせ】
龍谷大学理工学部博物館学芸員課程　横田岳人
yokota@rins.ryukoku.ac.jp ☎ 077-544-7108

主催：龍谷大学理工学部博物館学芸員課程
共催：「10年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会
【委員会構成メンバー】特定非営利活動法人 西日本自然史系博物館ネットワーク、伊丹市昆虫館、さしわだ自然資料館、滋賀県平和祈念館、大東市立歴史民俗資料館、高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）、認定特定非営利活動法人 大阪自然史センター、龍谷大学理工学部博物館学芸員課程、結Creation
協力：浪江町教育委員会、ライフミュージアムネットワーク実行委員会、龍谷大学社会学部築地研究室、龍谷大学先端理工学部

新型コロナウィルス感染拡大防止のため、入館の際、マスク着用・検温・消毒をお願いしております。

③ 大東市立歴史民俗資料館

【概要】

施設名		大東市立歴史民俗資料館
展示タイトル		大東の歴史と防災－10 年間ふるさとなみえ博物館－
展示期間		2021 年 11 月 22 日（月）～12 月 5 日（日）（14 日間）
主催・共催・協力		【主催】大東市立歴史民俗資料館 【後援】大東市、大東市教育委員会
展示内容　キーワード		①郷土災害史　②郷土教育　③防災対策
担当者		鮫島早葵
入場者数		507 人（展示スペースのみのカウントはできないので、期間中の館全体の入館者）
内容		別添
関連事業	タイトル	【大東の歴史と防災－10 年間ふるさとなみえ博物館－関連イベント】 紙芝居　読み聞かせ－奇跡の請戸小（うけどしょう）避難物語－
	内容	浪江町教育委員会より紙芝居「奇跡の請戸小避難物語」を借用し、11 月 28 日（日）と 12 月 5 日（日）に各 1 回、読み聞かせを行った。
	参加人数	11 月 28 日（日）：10 人、12 月 5 日（日）：9 人
報道記録		日本経済新聞（12 月 3 日の夕刊）
その他		

【展示風景】

【展示内容】

本展は２つのテーマ「大東の水害と防災」、「10 年間ふるさとなみえ博物館」と、ミニコーナー「大東地域調べ」で構成しました。「大東の水害と防災」では、大東市内で多大な被害を受けた昭和 47 年（1972）の「昭和 47 年 7 月豪雨」に関する資料を紹介しました。本展は常設展示室前の廊下で展示を行ったため、スペースの都合上、主に写真展示を行いました。大東市秘書広報課が所蔵する水害時の様子を撮影した古写真や、大東市立住道北小学校に現存する水没の痕跡が残る衝立の写真を展示しました(写真１)。また、「昭和 47 年 7 月豪雨」時に大東市在住の方々から聞き取り調査を行い、地区ごとに情報をまとめました(写真 2)。水害時、寝屋川と恩智川に挟まれた中ノ島（住道二丁目の一部の通称）は特に被害を受けました。しかし、水害後に河川が改修され現在は存在しないため、昭和 44 年空中写真と都市計画図を加工し、位置が分かりやすいように表しました。

写真１：水害時の古写真

写真２：各地区の水害情報

「10 年間ふるさとなみえ博物館」では、東日本大震災での原子力発電所事故で全町避難を余儀なくされた、福島県浪江町の小学生が避難先再開小学校で地域調べを行った成果を展示としてまとめた資料を浪江町教育委員会より借用し、展示しました。前述のとおり、展示スペースが限られるため、主に浪江町の地域性を読み取ることができる「なみえっ子カルタ」や「なみえ新聞」等を選出しました(写真 3・4)。「10 年間ふるさとなみえ博物館」を作った子どもたちの想いが伝わるように、当館で各資料のキャプション作成は行わず、浪江町について詳しくない人が見ても理解できるような補足説明を加えるにとどめました。

写真３：なみえっ子カルタ

写真４：なみえ新聞

ミニコーナー「大東地域調べ」では、大東市の歴史や文化を紹介する「だいとうのええもん」や、平野屋新田会所跡の保存や活用について取り組んでいる平野屋新田会所サポーター会議が発行している「かわら版」、郷土の歴史について研究する旧南郷村歴史再発見研究会が発行している報告書を手に取って読んでもらえるように展示しました(写真 5)。さらに、当館学芸員とともに調査や展示を行っている市民学芸員が作成した「市民学芸員レポート」も併せて展示しました。

写真 5：大東地域調べ

大東市立歴史民俗資料館

市民学芸員REPORT

創刊号

そこに山があり
川が流れていた

写真 6：市民学芸員レポート

【関連事業】

展示関連事業として、11 月 28 日（日）と 12 月 5 日（日）に「紙芝居　読み聞かせ－奇跡の請戸小避難物語－」を開催しました。浪江町教育委員会より、紙芝居「奇跡の請戸小避難物語」を借用し、当館学芸員が読み聞かせを行いました。11 月 28 日（日）は 10 名、12 月 5 日（日）は 9 名の参加があり、未就学児からご高齢の方まで様々な年代の人々に聞いてもらうことができました。参加者からは、「自分と同じ年代の子どもたちが皆で協力して、一人の犠牲も出さなかったことに感動した」や「日頃から防災について考えなければならないと思った」等の感想をいただきました。

写真 7 :紙芝居の様子

令和 3（2021）年度　　ミニ展示「大東の歴史と防災－10 年間ふるさとなみえ博物館－」　アンケート
回収枚数：18 枚

1. 本展をどちらで知りましたか（重複可）

・市報　3 名
・チラシ　1 名（大東市立歴史民俗資料館で）
・ポスター　1 名
・知人から聞いて　4 名
・資料館の前を通りかかって　6 名
・その他　6 名（新聞）

2. 展示内容について

・大変よかった　8 名
・よかった　7 名
・ふつう　1 名
・あまりよくなかった　0 名
・よくなかった　0 名

感想

・「子ども達の作文や記事が印象的でよかった。」
・「なみえ博物館の発想にすごいの一言です。子どものカルタ制作に胸がうずきました。これからもガンバって！」
・「ふるさとなみえを見に来ました。」
・「子どもたちがこれほど内容のつまったものを作っていることに驚きました。僕自身も頑張らないと、と思いました。」
・「子どもたちがふるさとを学ぶ大切さを改めて感じることができました。紙芝居も臨場感に溢れ、当時の様子がよく分かりました。」

3. 来館頻度について

・はじめて　8 名
・ときどき　5 名（1 か月に 1 回、4 か月に 1 回、6 か月に 1 回）
・よく来る　5 名（月に 3 回くらい、10 回くらい、5 回くらい）

4. 今後のどのような展示・講座をご希望ですか

・「お寺・寺社とのかかわり」
・「三好長慶の展示と具体的な歴史展」
・「東部・中垣内～北条地区の今昔を見たい」
・「古文書、水害について」
・「もう少し大東水害について詳しく知りたいです」

5. お客様のことについてお教えください

①年齢

・10 歳未満　0 名
・10 歳代　　0 名
・20 歳代　　2 名
・30 歳代　　2 名
・40 歳代　　1 名
・50 歳代　　3 名
・60 歳代　　4 名
・70 歳代　　5 名
・80 歳以上　1 名

②住まい

・大東市内　7 名
・大東市外　11 名（寝屋川市、豊中市、大阪市、島本町、兵庫県、京都府、神奈川県）

③来館方法

・徒歩　　4 名
・自転車　　5 名
・車　　5 名
・公共交通機関　3 名（JR）
・その他　　1 名（バイク）

④　滋賀県平和祈念館

【概要】

施設名		滋賀県平和祈念館　地域交流室
展示タイトル		「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展－福島県浪江町と滋賀県との交流－
展示期間		2022 年 1 月 12 日（水）～2 月 13 日（土）【前期】 3 月 10 日（木）～4 月 10 日（日）【後期】
主催・共催・協力		【主催】滋賀県平和祈念館 【共催】「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展実行委員会 【協力】浪江町教育委員会、ライフミュージアムネットワーク実行委員会、米原市近江公民館、滋賀県防災危機管理局
展示内容　キーワード		①郷土教育　②浪江町の「日常」　③防災教育
担当者		日高昭子、木村大喜
入場者数		2,233 人（巡回展のみのカウントはできないため、期間中の館全体の入館者数）
内容		別添
関連事業	その 1	福島県浪江町の方々と米原市近江公民館との交流
	内容	震災直後から福島県へ支援してきた米原市近江公民館のスタッフらは、支援で繋がった縁から、福島県二本松市に避難した浪江町立避難先再開小学校の物資支援を始め、浪江町の方々や児童たちとの交流が深まっていった。ここでは、震災後の近江公民館の取組を体験談、実物資料を交えて紹介した。
関連事業	その 2	私たちの住む地域を見つめ直そう―滋賀県の災害と防災－
	内容	巡回展を通して、自分たちが住む地域を見つめ直す取組として、滋賀で起こった災害と隣接する原子力発電所について、パネルにて県の取組と個人の備えを紹介した。
報道記録		滋賀報知新聞 2021 年 12 月 3 日朝刊・2 面（コラム記事） 東近江スマイルネット 2022 年 1 月 12 日 18 時 びわ湖放送 2022 年 1 月 19 日 中日新聞 2022 年 1 月 26 日朝刊・13 面 NHK 大津放送局 2022 年 1 月 25 日 18 時 30 分 週間滋賀民報 2022 年 3 月 20 日・3 面 テレビュー福島 2022 年 3 月 11 日
その他		県立彦根東高校新聞部の福島特集にて取材していただいた。掲載は同年 5 月頃の予定。

【展示風景・「10 年間ふるさとなみえ博物館」】

【展示内容】

本展示では、展示の核である「10 年間ふるさとなみえ博物館」と関連展示である「福島県浪江町の方々と米原市近江公民館との交流」、「私たちの住む地域を見つめ直そう―滋賀県の災害と防災－」の 3 つの構成に分けて展示しました。

まず展示の導入では、福島県浪江町の紹介と、東日本大震災とその後の東京電力福島第一原子力発電所の事故により浪江町の人々が二本松市へ避難し、児童たちもふるさとを離れざるを得ない状況であることを解説しました。二本松市内に開校した浪江町立避難先再開小学校では、郷土学習「ふるさとなみえ科」を実施しました。児童たちは、地域や全国の方々と交流し、「なみえ新聞」や「なみえっ子カルタ」の学習成果物を残しました。それらが「10 年間ふるさとなみえ博物館」の基になったことを紹介しました。

前期（1 月 12 日～2 月 13 日）では、展示の核である「10 年間ふるさとなみえ博物館」の作品の中から、児童たちが制作した「なみえっ子カルタ」や「なみえ新聞」、十日町祭で披露されたおみこしや和太鼓の実物を展示しました。特に「なみえっ子カルタ」は、児童たちが見た浪江町の日常の風景や思いが伝わる作品であり、「海」、「日常」、「祭り、イベント」、「浪江町の未来像」に分けて紹介しました。

関連展示の「福島県浪江町の方々と米原市近江公民館との交流」では、震災直後から福島県各地で支援を続ける米原市近江公民館の取組を紹介しました。前に紹介した「なみえっ子カルタ」は、避難先再開小学校と交流のあった団体に贈られたものです。近江公民館内の児童クラブは、「なみえっ子カルタ」のお礼に「おかえりカルタ」を制作しました。地元米原市の紹介や支援を続ける浪江の児童を思うカルタもあり、近江公民館と浪江町を繋ぐものであるため紹介しました。

後期（3 月 10 日～4 月 10 日）では、「10 年間ふるさとなみえ博物館」を通して、来館者に対して現在の浪江町を知ること、自分たちの住む地域を見つめ直し災害と防災について考える機会となるよう企画しました。前期と同様に「10 年間ふるさとなみえ博物館」のもととなった「ふるさとなみえ科」の取組と「なみえっ子カルタ」を展示しました。また、震災から 11 年経った現在の浪江町の復興状況や人口、避難状況等を紹介しました。

関連展示では、「福島県浪江町の方々と米原市近江公民館との交流」、「私たちの住む地域を見つめ直そう―滋賀県の災害と防災－」を紹介しました。「福島県浪江町の方々と米原市近江公民館との交流」では、前期と同様に米原市近江公民館の取組と、「おかえりカルタ」を紹介しました。

「私たちの住む地域を見つめ直そう―滋賀県の災害と防災－」では、地域の災害と防災の観点から、これまでの災害の歴史や原子力災害と防災についてパネルや教科書を通して紹介しました。また、個人でできる取組として避難グッズ等の実物資料を紹介しました。

「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展　アンケート（感想）

期間：2022 年 1 月 12 日から 2 月 13 日（前期分のみ）
場所：滋賀県平和祈念館　地域交流室

この時期は、県内の小学校 6 年生が平和学習のため来館していました。感想の多くは、その児童たちが寄せたものです。

・しがに避難して来られていた人が「いち」で浪江やきそばの屋台を出されました。太っといめんにびっくりしました。食べながらとってもおいしかったです。又、食べたいです。
・いろんな物が展示されていてすごかったです！！
・いろんな展じぶつがありすごかったです。がんばってね～　藤田
・おみこしのデザインがすごいと思いました。
・生まれ育てられたふるさとを大切におもう心が伝わって来て感動しました。
・服がカッコイイです。
・失なわれた“過去”を思いおこして“今、残す”気持ちが動かされ、身体が動かされ、手を取り合っている姿を見せていただきました。感動しました。
・カッコー鳴くふる里　津島の山、川、楽しく思い出しみんな元気でいることうれし
・「んだげっちょ」すごい　むずかしかった！アハハ　カルタの絵とってもきれいでかわいかったよう！　－Ｎより－
・なみえっ子カルタから、ふるさとを大切にする気持ちが感じられた
・ふるさとで遊べるかるたがすごかった。かるたを教えたのがすごかった。　莉空
・かるたの１つ１つの意味に気持ちがこもっていてよかった！！　　朝ザクラ
・知らなかった事がたくさん知れて良かったです！！　　Ｙ
・いろんなしんさいについておもしろかったです。福島の復興が早く終わることを祈っています。　　坂井
・なみえ町の人たちのふるさとを大切にする気持ちが感じられました。
・ふるさとの復興のため、たくさんの人が協力して、がんばっていることを知りました。ぼくもできれば、協力したいと思います。　　Ｋ・Ｒ
・昔からかるたがあり、おみこしにかるたがついていてすごい！　　のん
・人のあたたかみが感じられる素敵な展示でした！福島県の復興を滋賀から祈っています。
・そのときのいろいろなてんじ物がありすごかったです。　　青山
・たくさんの人たちから支えんをうけて、私からも心から復興をお祈りしています。おみこしがよかった！滋賀にいてもふっこうをいのっているよ
・なみえっ子みこしが明るくされていてすごかったです！
・げんきをだしてください。このせんそうのへいわきねんかんは、とても悲しい所もあればたのしい所もあります。
・いろんなてんじ物がありすごかった　最高です！　板倉
・福島県の方々は、地元が大好きな人が多いと思います。浪江町が大好きな子供達の様子がよくわかりました。「始めよう福島から」

・ふるさとのことを思ったカルタがたくさん書かれていてきれいだと思いました。　心
・カルタがあって、たのしそうだと思いました。
・てんじぶつをみさしていただきました。私もかるたをつくってみようと思いました。
・おみこしのおりがみや色合いがきれいでよかった！！　　しー
・おみこしが紙ですごいと思った　　フータの父
・カルタがいっぱいあって楽しかった。　　中西
・その時のくらしがよく分かりました。復興に向けてがんばってください！！がんばれ　めー
・なみえっ子かるたに色々な絵が書いていていいと思いました。
・いろんなてんじぶつがありすごかったです。おもしろかった！！　　山田
・ぼくには何もできません。それでも、福島県や東北を応援したいです。復興に向かって、頑張ってください。（そばた）
・ＴＯＫＩＯさんが好きなので、福島に興味を持っています。「鉄腕 DASH」も見ています。（そばた）
・落ち着いたら、福島県を旅したいです。おいしいものをたくさん食べたいです。（そばた）
・なみえ町はとても被害を受けていましたが、自分たちはあまり被害がなかったのでもっと支えんしたいと思いました。
・なみえっ子かるたには強い思いがこめられていていいなと思いました。
・おみこしがカラフルでいいと思った！早くふっこうすることをいのります！　ガンバレ　★ガンバレ★　ホタテ
・おみこしがカラフルですごかった。
・おみこしにかるたが付いてあったり花がはってあって（おりがみ）あそび心があり！！　○○に夢中な人間
・おみこしにかるたやおりがみがはってあってかわいかったです　　自分
・「んだげんちょ」という方言がかわいかったです。
・いろんなてんじ物がすごくてびっくりしました。　　稜馬
・かるたがいっぱいあってすごいと思いました。
・おみこしが大きかった。はってあったかるたがじょうずだった
・かるたの絵とかがすごかったしかるたを教えたのがすごかった。おみこしにかいてるかるたよかった。
・いろんなしんさいの出来ごとを知れてよかったです。
・なみえっ子カルタ一枚一枚に地域への思いが感じられました。　　木村
・10 年間でいろいろな物がたてられててすごいと思いました。
・できることなら、１日でも早く、全町民が戻って来られたらと強く思います。さらなる復興を願っております。
・おみこしが紙で、できていてすごいと思いました。　　T
・ふるさとを思い友人の気持ちが表れて良かった。早く帰れることを祈ります。
・「んだげんちょ」をしてみたいと思いました。
・カルタを見て久しぶりにしてみたいと思った。
・カルタ一つ一つとても心にひびきました。ふるさとのことがわかりました。　ミスターM より
・福島県のみりょくはすごいなあと思いました。また福島県に行ってみたいです。　星野

・“オリジナルのかるた”とっても楽しそう♡　　マシュマリン
・地域で行っている交流活動などは地域の歴史や文化を残していくために大切なことだと思いました。　松村
・おみこしがカラフルですごいと思いました。
・カルタをやってみたい。いろんなえがらがあっておもしろかった。
・おみこしがかこよかった。♡♡♡♡♡山下
・タイコデッカー
・いろんな物が展示されていてすごかったです！！　　K
・いろんな物が展示されていてすごいです。
・そのときの暮らしが分かるカルタがたくさんつくられていた。　　山中
・10 年間ふるさとなみえ博物館のかるたはとてもすごかったです。　ミスターYanoA
・今の私にできることはなんなのかを、特に考えることになりました。それはつなぐことだと思います。
・いろんな物がてんじされていてすごかったです。
・このてんじぶつで、“幸せ”と“命の大切さ”を実感しました。これからも 1 日 1 日大切に生きていこうと思いました。　　竹内

⑤ きしわだ自然資料館

【概要】

施設名	きしわだ自然資料館
展示タイトル	「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展 －ふるさとの記録と学び
展示期間	2022 年 3 月 1 日（火）～27 日（日）（14 日間）
主催・共催・協力	【主催】きしわだ自然資料館 【共催】「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展実行委員会 【協力】浪江町教育委員会、 ライフミュージアムネットワーク実行委員会
展示内容 キーワード	①郷土教育、②浪江町の人々の生活と歴史、③防災対策
担当者	平田慎一郎
入場者数	1,616 人（巡回展のみのカウントはできないため、期間中の館全体の入館者数）
内容	別添
報道記録	テレビ岸和田 2022 年 3 月 14 日（デイリーニュース）
その他	八尾市立しおんじやま古墳学習館のスタッフ 10 名が、研修の一環として見学に来られた。

【展示風景】

【展示内容】

本展は「10 年間ふるさとなみえ博物館」を中心に構成し、ミニコーナーとして岸和田市の防災についても紹介しました。展示の核である「10 年間ふるさとなみえ博物館」は、東日本大震災および福島第一原子力発電所事故により全町避難となった福島県浪江町の小学生が、二本松市の小学校校舎を借りて開校された浪江町立避難再開小学校で 10 年間行ってきた郷土学習「ふるさとなみえ科」の成果をまとめたものです。運搬する車に入らなかった一部の大型資料を除き、「なみえっ子カルタ」、「なみえ新聞」から「なみえっ子みこし」に至るまで、関西へ巡回した資料はほとんど展示することができました。他の巡回館と同様に、当館で各資料のキャプション作成は行わず、はじめての方には理解しづらい内容を補足する説明を加えるにとどめました。

岸和田市の防災について紹介するミニコーナーでは、今年の 1 月に更新されたばかりの岸和田市総合防災マップを手に取って見られるようにしたほか、家庭内での防災に役立つグッズ等の実物資料を展示しました。また、当館が東日本大震災の際に関わった被災地支援活動についてもパネルで紹介しました。

岸和田市の防災コーナー

「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展　アンケート（感想）

期間：2022 年 3 月 1 日（火）～27 日（日）

場所：きしわだ自然資料館　1 階多目的ホール

壁面に掲示した展示物の下にスペースがあったので、感想を付箋に書いて貼り付けてもらうようにしました。ちょうど、八尾市立しおんじやま古墳学習館のスタッフの方々が研修を兼ねて見学に来られたので、そのときの感想が中心です。後日、研修に参加した方からさらに詳細な感想が寄せられたので、その内容もそのまま掲載しています。

・「んだげんちょ」の意味が最後までわからなかったです。貴重な資料をありがとうございました。
・子どもたち、町の方たちの町を思う気持ちが伝わってきました。
・ずっとずっとずっと、応援しています。
・途中から、自分のまちがこうなったらこの子たちのように振る舞えるかどうかわからなくなって涙が溢れた。
・小学校の雰囲気が伝わってくるような、子どもたちの思いも感じ取れる展示でした。
・子どもたちと周囲の方々の浪江への深い思いが伝わってきました。それとともに、浪江町がとても魅力的な町なんだなあと感じました。まずは紅葉汁作ってみます！いつか、浪江にも行きたいです。

・浪江のことだけではなく、二本松のことも調べて二つの文化を学ぼうとしているのがとても興味深かったです。(子どもたちにとっては二本松もふるさとになると思いますので)
・生まれ故郷浪江の子どもたちのがんばっている様子を見させていただき、未来に向けて前向きに進んでいこうと思います。今は、親戚もみんな避難しています。もう少し経ったら是非浪江にも行ってみようと思っています。ありがとうございました。
・テレビや新聞ではわからないことを知れました。
・カルタが印象に強く残りました。子どもたちの町に対する深い思いが伝わってきました。
・震災から 10 年間にも及ぶ子供中心のプロジェクトがあったということにとても感心しました。どの展示もとても丁寧で、故郷を大切にする気持ちが伝わってきました。
・調査されるプロセスの中で多くのことを学ばれた様子が伝わってきました。子どもたちが宝物ですね！
・3 月 11 日にこの巡回展を見ると、色々と心にくるものがあります。残す、伝える、継いでいくという人間の営みの大切さを感じます。
・とても詳しく書かれていてたくさん知ることができました。

研修会　参加者コメント

参加者：50 代 3 人、40 代 3 人、20 代 3 人

【スタッフA】

巡回展の経緯が、西日本自然史系博物館ネットワークの方の発信であることをお聞きし、関西の皆さんにも、こういった取り組みがなされていることを知ってもらいたいという思いが伝わってきました。

また巡回展の展示だけではなく、所々にあった『自然資料館からの補足説明』が、福島県に馴染みのない方にもよりわかりやすいようにと配慮されている点が良かったと思いますし、担当者の方の伝えたいという思いが感じられました。

【スタッフB】

特にカルタの展示が心に残りました。1 枚 1 枚読んでいたら、身近なスーパーのことが読み札になっていたりと、子どもならではの感性で、飾らない浪江町の素敵なところ表していたので、とても印象的でした。子どもたちが書いた絵札からも、浪江町の素敵なところを知ってもらいたいという気持ちが伝わってきました。

【スタッフC】

浪江の展示は、浪江だけじゃなくて、二本松市のことも調べていて、とても興味深かったです。イメージ的に、ふるさとの浪江だけを調べた展示かな？と思っていたので。

子どもたちにとっては、避難している二本松も第二の故郷になるはずで、かべ新聞を見て、そうだよな～と気づきました。二本松の「ざくざく」と浪江の「紅葉汁」食べたくなりました(^^)

また展示手法ということでは、自然資料館からの追加の説明がありましたが、もう少しあった方が理解しやすかったかも？字の大きさも小さかったかな。と思いました。ただ、「福島の展示を持ってくる」という意味では、あまり付け加えない方がいいかも？難しい所ですね。

またカルタについては、「〇〇郷土カルタ」というのはよくあるものですが、今回のカルタは、その重みが全く違うな…と思いました。
「パパと見た　なみえの電車　スーパーひたち」
八尾だったら、アリオならあるかも？ですが、普通のカルタで、この内容が入るのはあり得ないかな？と…日常のありがたさ、平和のありがたさを感じました。
また郷土学習のアウトプット、調べたものを表現する手法としても、カルタは良い方法で、わかりやすいな～と改めて思いました。

【スタッフD】
故郷を離れて暮らさなければならなくなった人々を喜ばせたいという、子ども達の優しい気持ちが、この調査と記録の活動を行う動機である事に、博物館の持つ使命を重ねる事ができました。
地域の文化を受け継いでこられた大人に出会い、体験する中で子どもたちが大切な事に気づいていった事が、カルタや記録から読み取る事もできました。また、これに携われた方々も、失ったものを諦めないという気持ちになられたと思います。是非、岸和田の子どもたちに見ていただきたいと思います。

【スタッフE】
ふるさとなみえ博物館について、皆さんが書かれたのと少し違った視点から書きます。
故郷を離れる事を余儀なくされた先で、これだけ故郷の事をしっかり調べて形にしていることに感動しました。それとはまた別で、浪江の郷土料理紅葉汁と二本松の郷土料理ざくざくの事を両方紹介している新聞をみた時に、紅葉汁が二本松でも広く食べられるようになると、かつては浪江だけの料理だったのが二本松でも食べられるようになる…と、A 地域で行われていた（行事、料理、昔話伝説など）が、A 地域の人達が移住した B 地域でも行われるようになった、という民俗事例はこういう感じで発生したのかな、発見したような気持ちになりました。今でこそネット社会なので、どこにいてもどんな料理でもレシピは入手できますが、昔はそうだったんだろうなぁ～と。

【スタッフF】
波江小学校の展示ですが、自分の故郷に住めなくなるという、ほとんどの人が経験し得ない事を積極的に発信されてる姿に感銘を受けました。やはり岸和田での開催と結びつけるのは厳しいものがあると思いますが、こういった巡回展示も個人的にはアリだなと感じました。

【スタッフG】
市のお祭りをテーマにした新聞の中で、キャラクター同士の掛け合いがあったのが印象に残っています。レシピやお祭りの事も詳しく書かれていて、地元ではない人も見て楽しめる展示だと私は思いました。カルタの展示も、丁寧にイラストを描いている子も居て、こんな場所があるんだなぁと想像もできました。
ただ補足説明の位置が低く、字が小さいのでその点は見づらいなと思いました。メインで見せるものではないとは分かってはいるものの、どうしても気になってしまいました…。
それと他のスタッフの意見でもありましたが、しおんじやまでもカルタを作るのもアリですね😊

【スタッフH】

私は 10 年間ふるさとなみえ博物館の展示では、カルタが一番印象に残りました。子供たちの記憶の中の浪江町がそこにあって、時間とともに薄れていく部分をこういう形で残すのは面白いと感じました。その地域の人にとっては、景色が頭の中に思いうかび、地元に関する事柄なので、自分の思い出も想起させるような展示なのではないかと思います。

また、感想ノートではなく、最後に付箋に感想を書くのが新鮮でした。展示を見ながら他の人の視点や、意見を知れるので良かったです。気になった部分の近くに貼れるようにすると、来館者の興味をひいたものが一目でわかったり、詳しく見てみようという気持ちにさせたりできるのではないかと思いました。

【スタッフＩ】

八尾市の郷土カルタのイメージでしたが、子どもの目線で作られていて、まちなみや楽しい出来事が読まれていて印象に残りました。そして、浪江も二本松も「ふるさと」ととらえて、郷土料理の紹介もあり興味深い記事でした。インタビューした方との交流した手紙もあり、大人も子どもも町の伝統や文化を受け継ぎ学んでいく。と前をむく姿を感じました。

⑥　伊丹市昆虫館

【概要】

施設名		伊丹市昆虫館
展示タイトル		プチ展示「巡回展　10 年間ふるさとなみえ博物館」
展示期間		2022 年 5 月 25 日（水）～6 月 27 日（月）
主催・共催・協力		【主催】伊丹市昆虫館 【共催】「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展実行委員会 【協力】浪江町教育委員会、ライフミュージアムネットワーク実行委員会
展示内容　キーワード		郷土教育
担当者		坂本昇、野本康太、奥山清市
入場者数		17,014 人 （巡回展のみのカウントはできないため、期間中の館全体の入館者数）
内容		「10 年間ふるさとなみえ博物館」の資料から抜粋し、1 階特別展示室の一角に展示した。団体見学の多いシーズンのため、大型の展示物は「なみえっ子みこし」のみとし、それ以外の立体の資料は展示ケースに収めて展示した。基本的に当館独自の各資料の解説などは行わず既存の解説パネルやキャプションを使用するようにつとめ、当館作成は挨拶パネルと解説がなかった一部の展示、および会場内で本展示であることを示すためのサインを掲示するにとどめた。また、他会場で実施されたような会場独自の展示コーナーは設けなかった。 展示スペースは展示室入口付近の壁面と奥の展示ケースに分けて構成した。入口付近の壁面では展示の導入として、浪江町の紹介、「ふるさとなみえ科」の活動紹介、活動の年表、避難先の津島小学校で開催された「ふるさとなみえ博物館」の映像上映をおこなった。開催中に届いたライフミュージアムネットワークの資料もここに並べ、閲覧できるようにした。 「館長あいさつ」から奥の展示ケース周辺を「ふるさとなみえ科」の学習成果中心の展示とし、「博物館の使命」を中心に、なみえ焼そばと B-1 グランプリなどでの応援衣装、なみえっ子カルタ、なみえっ子新聞、んだげんちょ、なみえっ子みこしの各資料のほか、地域の人々との交流の様子のパネルや折り鶴の一部を展示した。
関連事業	タイトル	なし
	内容	
報道記録		ベイ・コミュニケーションズ 2022 年 6 月 3 日-6 月 9 日
その他		ITAMI ECHO コラム（ウェブメディア）2022 年 6 月 17 日　坂本執筆

【展示風景】

展示室入口：

博物館の看板を設置しました。展示室内部左側に本展示があり、他の場所では常設の標本展示と、プチ展示「ムカデ・サソリ展」を開催。

展示室の様子：

左手壁面に浪江町の紹介や交流年表などのパネル展示と、津島小学校での展示映像を上映しました。奥及び右手に学習成果を展示しました。

導入部：

浪江町の紹介やふるさとなみえ科の変遷、津島小での展示の映像、活動の年表の展示のほか、関係書籍の展示や配布、アンケートコーナーを配置しました。

館長あいさつとなみえ焼そば：

導入部に続いて展示しました。

なみえっ子みこし：

大型の展示物はこれのみとし、展示コーナーの中央に設置しました。

博物館の使命、なみえ新聞、んだげんちょ：

大型のパネル類を壁面ケースに入れ、前に陶器などを展示しました。

なみえっ子カルタ、支援や交流を続けてくださった方々：

展示ケース内で幾つかのカルタとともに作者による解説を展示しました。

展示チラシによるサイン：

展示室内で本展示と他の展示との明確な仕切りがなかったため、各コーナーにこれを配置して本展示の一部とわかるようにしました。

巡回展10年間ふるさとなみえ博物館　伊丹会場アンケート集計表

アンケート実施日　2022年5月25日（水）～6月27日（月）（展示期間中全日）
回答数　27

●来館経験

回答	回答数	割合
1.　はじめて	10	37%
2.　たまに	8	30%
3.　年に何回も来る	9	33%
合計	27	100%

●伊丹市昆虫館に来た目的（複数回答あり）

回答	回答数	割合
1.　昆虫館全体を楽しみに	13	48%
2.　チョウ温室	2	7%
3.　チョウ以外の昆虫	0	0%
4.　昆虫の標本	1	4%
5.　昆陽池公園のついで	0	0%
6.　プチ展示	1	4%
7.　他の展示（ふるさとなみえ博物館等）	7	26%
8.　家族・友達のつきそい	4	15%
9.　その他	0	0%
合計	28	104%

●この展示の情報源（複数回答あり）

回答	回答数	割合
1.　来てはじめて	16	59%
2.　チラシ	5	19%
3.　人から聞いた	3	11%
4.　前に来館したとき	0	0%
5.　テレビ	0	0%
6.　ラジオ	0	0%
7.　新聞	2	7%
8.　雑誌	1	4%
9.　昆虫館のホームページ	1	4%
10.　SNSやメール	1	4%
11.　もよおしあんない	0	0%
12.　その他	0	0%
合計	29	107%

●プチ展示「ふるさとなみえ博物館」の満足度

回答	回答数	割合
1.　とても満足	15	56%
2.　まあ満足	11	41%
3.　不満	1	4%
4.　たいへん不満	0	0%
合計	27	100%

●伊丹市昆虫館の満足度

	伊丹	割合
1.　とても満足	19	70%
2.　まあ満足	8	30%
3.　不満	0	0%
4.　たいへん不満	0	0%
合計	27	100%

●回答者属性

回答者居住地域	回答数	割合
1.　伊丹市内	6	22%
2.　宝塚・川西・猪名川	2	7%
3.　西宮・川西・池田・豊中	8	30%
4.　神戸市	2	7%
5.　その他兵庫	2	7%
6.　その他大阪	4	15%
7.　その他	2	7%
無記入	1	4%
合計	27	100%

回答者年代	回答数	割合
1.　小学校まえ（幼児）	2	7%
2.　小学1-3年	8	30%
3.　小学4-6年	4	15%
4.　中学生・高校生	0	0%
5.　高校卒業－20代	0	0%
6.　30・40代	6	22%
7.　50代以上	7	26%
合計	27	100%

回答者交通機関	回答数	割合
1.　徒歩	0	0%
2.　自転車	6	22%
3.　自家用車	11	41%
4.　タクシー	0	0%
5.　路線バス	4	15%
6.　電車	1	4%
7.　観光バス	1	4%
8.　その他	1	4%
無記入	3	11%
合計	27	100%

巡回展　ふるさとなみえ博物館　伊丹市昆虫館会場　アンケート自由記入

◎印象に残った展示のなまえとコメント

・**カルタ**　丁寧に心を込めて描いているのが伝わって来ました。
・**カルタ**　うまく編集されていると思いました。
・**カルタ**　子どもたちの笑顔と周囲の人たちの姿がとても印象に残りました。
・**カルタ・看板**　浪江町が身近に感じれました。看板運んで展示していただきありがとうございます。とても想いが込められて作られたものとわかりました。
・**おみこし・看板**　よく調べていたと思います。焼き物を自分もしたことがあります。時間をかけ家具の扉を作り本当にこだわって作られたと思います。
・**博物館の使命**　館長の気持ちが伝わる文字でした
・**新聞**　地域に残したいことを取り上げている
・**新聞**　新聞社・テレビ局の助言もあったが（途中判読できず）工夫がすばらしい
・**食じまん 2・ざくざく・紅葉汁・なみえっ子カルタ**　どの新聞も子どもたちが協力し、地域の方々と交流し、様々なアドバイスを生かして一生懸命作ったことがよく分かる。大人が読んでおもしろかった。カルタにあふれている子どもたちの思いに感動した。
・**んだげんちょ**

◎展示の感想、メッセージなど

・とても素晴らしい展示でした。原発事故がなければと今でも思います。可哀そうなこどもたちではなく人を喜ばせたいという思いをもった人とのつながりを大切にする子どもたちに出会えてよかったです。
・おもしろかった
・手作りから準備した時間や背景が想像でき良いものだと感じた
・色んな機会で目にすることで震災について考えることができるのがいいなと思いました。
・ふるさとを学ぶこと大切にすることはどのような形であっても重要だし何かできることがあると思いました。なみえ小で郷土学習をするのは大変だっただろうと思いました。でも大切なことだったのですね。
・2019 年から 2 年間福島市に住んでいました。見たくて見れなかったこの展示を関西で見られることに感謝します。
・なみえ町の様子がよくわかりました。
・色々な体験をバネにして楽しい生活してそうでうれしかった
・ふるさとを盛り上げようとしている心意気が伝わってきました。小学校が再開されますように
・浪江の良さが、ふるさとの未来への子供たちの思いが、よく伝わってきた。ぜひ訪れたい気にさせてくれる
・福島の現地のこと、ここ数年の様子など知る機会がなく、展示があると知り来ようと思いました。浪江の方たちが実際に作ったものに触れることができ良かったです。
・昆虫目当てだったためスルーした

ゆ
ゆ 遊具がいっぱい
自然もいっぱい
大六公園

り
り リングバトン
やりたかったな
鼓笛パレード

へ
へ へびもいた
いなごもいた
田んぼには

せ
せ 絶品だ
なみえ焼きそば
ぜひ食べて
ふるさとの味

そ
そ 相馬焼
伝統工芸
愛着だ

た
た 大漁旗
誇りとなびく
出初め式

学会等での発表の機会を得て

今回の巡回展は、子ども達にとっての郷土や郷土教育、それぞれの地域における博物館の役割などを再考することを目指して近畿地区の 6 施設(自然史系 3 館、人文系 2 館、大学 1 校)で実行委員会を形成して実施しました。借用した資料群と一緒に、それぞれの館の特性や地域課題などを活かしたコーナーを設置することで、実施館が地域において何を取り組むべきかの検証も念頭におきました。

この巡回展を通して、浪江町に今も多く残る帰還困難区域や避難生活の状況、避難を余儀なくされた子どもたちの故郷への思い、人を思う気持ちなどを関西の方へ伝えることは、ある程度の達成はできたと考えています。今後は、各自が感じた思いや地域に求めていることなどを今後に繋げていくことが、博物館に求められるひとつの役割ではないかと感じています。

会期終了が近づくにつれ、より多くの方にこの取り組みを知っていただきたい。会期が終了しても、地域を学び、記録するだけでなく、未来に向けて活用していくためには、博物館に何ができるかを今後も引き続き考えていきたいと考えるようになりました。そこで、日本展示学会の学会誌『展示学 63』の紙面で、二本松で開催された「10 年間ふるさとなみえ博物館」の開催目的と展示状況について報告しました。次に、巡回展の 5 会場目になるきしわだ自然資料館で、会期直前のタイミングで資料館友の会と共催で開催している研究発表会「メランジェゼミ」があり、巡回展を開催するに至った経緯などを発表する機会を得ることができました。最後に、6 月始めに高知で開催された日本ミュージアムマネジメント学会第 27 回研究大会では、巡回展の開催と、博物館が地域で何ができるかを議論する機会の創出と、巡回展終了後の資料活用の機会へとつなぐきっかけを目指してポスター発表をしました。この時は、来場者から「巡回展の実施により、各施設で得たことや新たな課題はどのようなものがあったか」などの質問をいただくことができ、今後議論を進めていく上での課題を得ることができました。

2022 年 6 月末をもって、巡回展は終了しましたが、この一年間の実績と外部へ発信した中で得た課題を中心に考えていきたいです。

高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）・結 Creation
北村美香

報道記録

各館での取り組みを新聞、テレビ、ラジオ等で報道していただきました。また、学会、研究会で発表しました。

高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）

NHK 関西ラジオワイド（10 月 7 日）

福島民報（10 月 9 日）

朝日新聞（10 月 20 日の朝刊）

福島民報社説（10 月 22 日）

龍谷大学瀬田学舎

中日新聞 2021 年 10 月 31 日朝刊・びわこ版

読売新聞 2021 年 10 月 31 日朝刊・地域面（滋賀）

びわ湖放送 2021 年 10 月 31 日 18 時のニュース（約 90 秒）

東京新聞 2021 年 11 月 4 日朝刊・特報面

京都新聞 2021 年 11 月 4 日朝刊・地域面（滋賀）

毎日新聞 2021 年 11 月 4 日朝刊・地域面（滋賀）

朝日新聞 2021 年 11 月 4 日朝刊・地方面（滋賀）

大東市立歴史民俗資料館

日本経済新聞（12 月 3 日の夕刊）

滋賀県平和祈念館

滋賀報知新聞 2021 年 12 月 3 日朝刊・2 面（コラム記事）

東近江スマイルネット 2022 年 1 月 12 日 18 時

びわ湖放送 2022 年 1 月 19 日

中日新聞 2022 年 1 月 26 日朝刊・13 面

NHK 大津放送局 2022 年 1 月 25 日 18 時 30 分

週間滋賀民報 2022 年 3 月 20 日・3 面

テレビュー福島 2022 年 3 月 11 日

きしわだ自然資料館

テレビ岸和田 2022 年 3 月 14 日（デイリーニュース）

伊丹市昆虫館

ベイ・コミュニケーションズ 2022 年 6 月 3 日-6 月 9 日

「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展を終えて　ふりかえり会

目的：巡回展の振り返りと自由トーク
日時：2022 年 7 月 29 日　19：00～21：00　ZOOM
参加者：（敬称略　五十音順）
　川延安直　（福島県立博物館）
　北村美香　（結 Creation、高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川））
　小林めぐみ　（福島県立博物館）
　坂本昇　（伊丹市昆虫館）
　佐久間大輔　（大阪市立自然史博物館）
　鮫島早葵　（大東市立歴史民俗資料館）
　高田みちよ　（高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川））
　西澤真樹子　（認定特定非営利活動法人　大阪自然史センター）
　日高昭子　（滋賀県平和祈念館）
　平田慎一郎　（きしわだ自然資料館）
　横田岳人　（龍谷大学）

高田）まず、浪江町に資料を返却にいった報告です。北村、高田で 7 月 5 日に浪江に行きました。福島県立浪江高校の体育館にサカイ引越センターから配送してもらって、検品をしました。このまま新しい施設に移すので開封しないでくれとのことで、箱の数だけ数えて返却しました。JR 浪江駅の北側に「ふれあいセンター浪江」が新築、オープンしており、グラウンドと交流センター、子ども用のふれあい元気パーク、お年寄り用の福祉センターがあります。交流センターの中に図書館と小さな展示場があり、ここに常設するということです。地域の民俗や、昔のポンプ車もあり、これで全部のスペースです。この一部に展示されるとのこと。今、道路建設が進んでいて埋蔵文化財がたくさん発掘され、新収蔵庫ができる予定で、資料は体育館からはそちらに移すと言われていました。図書館は児童室など居心地よさそうです。複雑なすべり台やトラポリン、ボルダリングなどがあり、子どもがいつでも遊べるコーナーが充実していました。新しい「なみえ創成小学校・中学校」も見てきました。無事、返却できて一件落着です。

福島県立浪江高校体育館へ資料返却

ふれあい交流センター　展示スペース

小林）本日の司会をさせていただく小林です。皆さま、本当に関西での巡回展どうもありがとうございました。「１０年間ふるさとなみえ博物館」の展示に関わった人間としてとてもうれしく、改めてお礼を言わせていただきます。皆様から巡回展をやってみてのご意見をいただいて、それを浪江や福島のみなさんにお伝えできたら私達もうれしく、そこから次への展開が生まれるかなと思いますので、いろいろご意見伺えたらいいなと思います。

では、最初はあくあぴあさんからお願いできますでしょうか。開催の感想とか、手ごたえとか、お客様からのご意見を伺いたいです。

高田）あくあぴあでの展示は防災学習というテーマとし、「なぜ高槻で浪江の展示をやるのか」という理由として、高槻の事例と浪江の展示が私の中では１：１のつもりだったのですが、浪江のほうのしつらえがわかりにくかったこと、プレート地震の模型が楽しすぎたことから、あまり浪江の展示の感想が聞けませんでした。ちょっともったいなかったです。浪江 100%でもよかったんじゃないかなと思いました。関西大学の防災研究室の学生さんが来た時には、南相馬出身の人がいて「懐かしい」とか「状況がよくわかる」と言ってくださったり、それ以外の人たちは「知らんかった～」と熱心に見てくださっていました。展示物が小学生の作った模造紙だったので、鉛筆を置いて落書きされることを心配してアンケートも置かなかったので、お客さんの声が拾えず残念なことをしたと思っています。

小林）ありがとうございました。一通り一回お話聞いてみましょうか。では続いては横田さん、どうもありがとうございました。

横田）非常にお世話になりました。だいぶん昔の話のような気がしています。昨年の 10 月 25 日から 11 月 6 日という 2 週間弱の期間で開催させていただきました。こういう機会をいただいたので社会学部の先生と相談してプレスリリースを流すことができ、前日に小林さんにも参加いただき内覧会を開催しました。あくあぴあから資料を受け取ってから突貫工事で展示を作ったので大変だった思い出があります。ちょうどコロナの感染対策で大学が外部から人を積極的に入れない時期と重なってしまったので、外部に PR できませんでした。プレスリリースで外に発信し、新聞・テレビにも取り上げてもらったのですが、もっとたくさんの人に見ていただきたかったなという思いがあります。授業でも宣伝したので来てくださった学生もいるんですが、こちらが期待したほどではなくて、学生よりも外部の人のほうがたくさん見ていただいたという結果になりました。だいたい 170 名ぐらいの方が来場され、東北に住まわれていた方とかが懐かしく見て頂いたということもあります。ダム建設とかでふるさとを失った人たちもふるさと喪失という部分で同じ悩みをしておられます。第二のふるさとをどう作っていくかということに関心をもって見ていただいたと思っています。全体としては口コミで広がっていった感じがありまして、後半は外部の方に多く見ていただいたかなと思います。最終日に当時の環境省の事務次官が来られるということで、学長にお願いして、学長以下大学の執行部に見て頂くことが叶いました。環境大臣の反応はどうかなと思いましたが、原発の問題とはからめないようにしたので普通にフラットにみていただけるんじゃないかと思っていました。福島というキーワードでみなさん原発のことを相当意識して構えているような雰囲気が、大学執行部の中にはあったような印象を持っています。

小林）ありがとうございました。やっぱり一回ずつみなさんから感想を聞きたいと思います。あくあぴあさんは後にするとして、龍谷大に行かれた方でご感想をお伺いしたいです。

高田）社会学部の先生がとても面白い方で、マスコミ・新聞社など何社も来られて反響があってよかったです。

小林）プレスリリースもかなりしっかり作りこんでやっていただいて、マスコミも何社も来て、丁寧にというか、だいぶん突っ込んで聞く記者さんもいましたよね。そんな印象でした。熱を入れて取材してくださってた感じでした。川延さんも龍谷行かれましたが、いかがでしたか？

川延）お世話になりました。結局、龍谷大学しか見に行くことができなかったので、貴重な時間をいただきました。この展示の中では一番嘉人館長に歳の近い人たちが展示に携わってくれたということで、とてもレアケースであり、得難い機会だったのかなと思っています。できればもうちょっと学生さんの声を聞きたかったのですが、取り組んでくださった志をとてもうれしく思いました。

小林）横田さんありがとうございました。続いて大東市立歴史民俗資料館、鮫島さんよろしくお願いします。

鮫島）大東では、二つのテーマで展示を行いました。一つは大東の水害と防災、一つは浪江の展示を二本柱で行わせていただきました。水害は大東市で 50 年前に起こった昭和 47 年 7 月豪雨という水害にテーマを絞り、当時の写真を中心に展示をしました。50 年たっているということもあり、水害を知らない子ども達が展示を見てくれて、大東でもこんな大きな水害があったんだということにとても驚かれていました。浪江のほうは展示スペースの関係で、主に壁に貼れるもの、廊下に置けるものを選択しました。来館いただいた方にお話を聞きますと、浪江という町のことはニュースで知っていたが、何が有名で、どういうところで、ということは知らなかったので、いい機会になりました、とか、関西では原発事故は時間がたってしまい過去のことになりつつあるけれど子ども達の展示を見て自分の子どもや孫に置き換えて考えると忘れてはいけないな、というような意見を頂戴しました。関連事業として請戸小学校の避難物語の紙芝居を浪江町の教育委員会様よりお借りして、11 月 28 日と 12 月 5 日の 2 回にかけて読み聞かせを行いました。こちらもお年寄りからお子さんまで幅広い年代の方にお越しいただきまして、「自分たちと同じ年代の子ども達が一致団結して一人の犠牲者も出さなかったことに感動して、今後防災訓練にも真剣に取り組んでいきたいと感じた」、とか、お年寄りの方からは「日ごろから防災のことについて自宅で家族みんなで話しあっていかなければならない」、などのご意見をいただきました。大東では大きな展示はできませんでしたが、地域の方々に浪江町のことを知っていただく機会となったり、大東の水害の歴史を知ってもらうことで地域調べや防災の一貫になったのではないかと思っています。

小林）鮫島さんからは読み聞かせのご提案をいただき、本当にうれしく、ちょっとだけ間にも入らせていただきました。いろんな形で工夫していただいて、伝えようとしてくださったのがわかって本当にうれしかったです。

北村）展示規模が小さかったので、どこまで浪江のことが伝わったかな、もう少しできたことがひょっとした

らあるんじゃないかな、と思いました。

ただ、それを後の展示にもつなげてくれています。大東水害の展示も少し幅を広げて今年も企画展として取り上げたり、昨年の経験をうまくつなげようとしているのが、大東の一つの特徴かなと思っています。

横田）大東さんの展示はかぎられたスペースによく広げていただいたなと思います。学校の教室を博物館にして、廊下のスペースに展示していただいていたので、どうしても目線が片側に偏りがちになってしまうので、導線をどう考えるのかは難しかったと思うんですが、限られたスペースのわりには思ったよりいっぱいいろんなものが展示してあったなという印象を受けました。本当にご苦労様でした。資料をしっかり丁寧に固定してあるところをみて、こういうふうにやればよかったんだなと展示した後ですが勉強させていただきました。

小林）では次。滋賀県平和祈念館、日高さんよろしくお願いします。

日高）私達の滋賀県平和祈念館では今年の 1 月 12 日から 2 月 12 日までと、後期として 3 月 10 日から 4 月 10 日まで浪江展の展示をさせていただきました。後期はパネルとかデータをつかった展示でしたが、前期ではお借りした子ども達の展示物を全部展示しました。平和祈念館では小学校 6 年生が平和学習で勉強するので、同学年の子ども達に被災地の浪江のこととか、ふるさとを離れて住んでいる方々の思いを知ってほしいと思い、それを狙いに展示を作ってみました。これまであくあぴあさんとか龍谷大学さんの展示を見て、こういう雰囲気なんだなというのをつかみつつ、特に龍谷大学さんはほとんど全部を展示されていて、雰囲気がよく分かったので参考にさせていただきまました。一番の展示は「なみえっ子カルタ」です。前の子ども達が作ったものと新しく作り直したものも全部出して、浪江の子ども達が見たふるさとの浪江を伝えて行きたいと思い展示しました。1 月から始めたんですが、コロナが広がって子ども達の来館が減り、感想を聞くことがむずかしかったんですが、同学年の子ども達も震災について親とかテレビとかで知っていることが多く、感じることが多いとの感想をいただきました。ちょうど 1 月に監修会議で、展示を見ていろいろ評価してくださる先生が二人いて、その先生にも浪江展を見てもらいました。「浪江の日常がよく出ているね」とおっしゃってくださったので、この「日常」というキーワードいいなと思って引き続き使わせていただきました。3 月の展示はカルタと、浪江の子ども達と交流のあった米原市の公民館さんの展示も合わせてしました。いろいろな方に見てもらえて協力してもらって展示を作りました。以上です。

横田）米原の子ども達が作ったカルタがありましたよね。「なみえっ子カルタ」に呼応した形で地元の小学生たちが自分たちのふるさとをカルタにするという取り組みをしている部分を紹介していただけたので、それがすごく特徴的でしたし、広がりを持つ活動だなと思って関心を持って見ていました。

米原の子ども達のカルタ

日高）ちょうど横田先生の龍谷大学の展示を見て、米原公民館のことを知ったので紹介させていただきました。浪江の

ことを思ったようなカルタもあったので紹介しました。

小林）龍谷大学でもそうですが、浪江と米原とのつながりを、ずっと支援をしてこられたところをご紹介いただいたので、改めて関西の皆さんが震災後に東北に、福島だけじゃなかったと思うんですが、来てくださって応援してくださったことを思い出しながら展示を見せていただきましたし、今回の展示を通して改めてそういうことを教えていただきました。資料を持って行くだけじゃなくてそこから更に広げて展開して調べて足してくださっていたのがとてもうれしかったです。「浪江の日常」というのはほんとにそうですよね。なかなか日常って展示になりませんが、特に今回の場合は日常をどう取り戻していくかということですので、そのための 10 年間を形として残してくれた展示だったんだなと改めて思いました。

北村）二本松での展示に一番似ていたのが祈念館かなと感じました。教室の感じが似ているのと、天井が低い部屋だったので、雰囲気が一番二本松に近かったと思います。

高田）付箋で感想を貼れるようになっていて、思いついた感想を書いてもらえるしつらえでいいなと思いました。あくあぴあでも、ちょっとしたコメントをもらえる展示をすれば良かったと思いました。

来館者の付箋での感想

西澤）見に来る方々ってそれなりに自分の中で福島のことが気になってたりとか、つながりを感じてたりして、そーっと見に来てそーっと帰って行ったと思うんですけど、付箋があると見に来た人それぞれの思いとか、動機だったりとかが静かに伝わりますね。大きな声でワーッと感想を書くような展示ではなかったので、そういう仕掛けがあったのがすごく良かったと思いました。私達も津島小で見た時に感想のコーナーで足が止まって泣いてしまったりとかしたので、思い出しました。

小林）それを含めて展示が追加されて大きくなった感じがしますね。私からですが、今回それぞれの館の特色があって、それぞれの館のミッションに組み合わせて浪江の展示をやっていただいたと思います。日高さんのところでは平和教育で学習に来る子どもたちに、とのことですが、平和教育と「10 年間ふるさとなみえ博物館」の展示が共存したことがすごく大きな意味だったと思っていて、あの展示が伝えることと平和教育は一緒に伝えるべきものだと思っています。今回、日高さんの所で展示をしていただいて改めてうれしかったです。次はきしわだ自然資料館平田さん、報告お願いします。

平田）2022 年 3 月 1 日から約 1 か月、24 日間ぐらい展示していました。それ以前に他の展示を見に行くことができず、あくあぴあだけ行けたんですが、イメージを十分固める前に始まってしまいました。軽自動車の公用車に載せられるだけ持ってこようかと思ってたんですが、龍谷大学のバンをお借りすることができ、無理かなと思っていたお神輿も持ってこれました。ふだん展示に使っている場所の半分ぐらいをきちっとシンプルに展示できたと思っています。自然系の博物館なので、被災地の支援活動にかかわったことと防災のことをちょっとだけ入れたんですが、深められず、やや取って付けたような感があったかもしれません。展示

をするときは教育委員会会議にかける必要があり、その際に浪江町と岸和田とのゆかりを聞かれたりしましたが、概ね興味を持ってくださって、学校の先生に見ていただきたいので積極的に広報してください、と言われました。予算や労力の余裕がなく、ポスターを作れず手刷りのチラシ程度でしか広報できなかったのが残念です。3 月 11 日を挟んでいるのでマスコミにも来ていただければと思っていたのですが、コロナの状況が良くなく、学校も来にくいということで、地元のケーブルテレビが取材に来た程度でした。新聞記者の方が興味を持ってくれ、知り合いにも進めたいと言ってくれたのですが、都合が合わなかったようです。展示初日に「八尾市立しおんじやま古墳学習館」がスタッフ研修に来てくれたので、お送りした感想はほとんどがそれです。うちも付箋に感想を書き込んでもらい、壁面に貼り付けてもらう形にしました。「しおんじやま」の皆さんは博物館のうち歴史系のところと関係が深いので、自然系とは異なった視点での貴重なご意見をいただくことができました。最初から他館での展示を見たうえで組み立てれたら良かったです。うちも自然のことだけでなく、民俗に関するものもわりとよく展示していますが、自分で一から企画したことはなかったので、自身の勉強になった展示でした。

小林）北村さんは設営を手伝われたんですね？

北村）当日設営のお手伝いをさせていただきました。場所的な問題と、きしわだ独自のものをどう組み込むのが効果的かな、というところが悩ましいとは思いつつ、全体像を見てもらう、浪江の日常を感じつつ、きしわだの方が自分たちと比較する材料になるといいなと思っていました。

きしわだの防災のコーナー

西澤）今まできしわだは震災に関する展示をいくつかやってこられたと思いますが、それと比べて違いはありましたか？

平田）過去に防災、災害の展示はやったことがあります。「南三陸町勝手に生物相調査隊展」もやりました。どちらかといえば「勝手に調査隊展」は生き物中心だったので自然に関心を持つ人の反応は自然系博物館的な展示として、感想もそういうのが多かったです。今回はもうちょっと年配の方が来られたら感想を得られたと思うんですが、そういう方があまり来られませんでした。幼稚園は来られたんで、にぎやかに見て興味はもってはくれるんですが、背景についての意見はないので、その辺はちょっとどうかな、というところです。

西澤）津島小でこの展示を見た時、「博物館業界の人はみんなこれを見るべきだ」と思ったんです。そういう意味できしわだが研修の行先となって博物館関係の人にじっくり見てもらえたのがうれしいなと思って、報告書を読んでいました。

小林）最後は伊丹市昆虫館、坂本さんよろしくお願いします。坂本さん、音声が出ませんね。じゃぁ調整している間にあくあぴあのご感想を伺いたいです。みなさん最初の館なので行かれたんですか？

横田）あくあぴあは浪江の展示と防災の展示があって、入った時のインパクトは浪江の展示が見えるんですが、展示の背景が書かれている部分がわかりづらく、わかりづらいところに遊べるおもちゃがあったので、限られたスペースで展示されていて難しい部分はあったと思うんですが、急いで作られたんだとも思うんですが、工夫の余地はあったのかなと正直思った展示ではありました。展示物の補強処置をしていただいたので感謝したいと思っています。

小林）学校の中で作ったものばかりなので、長期間の巡回展に果たして耐えられるのだろうかと心配をしていたのですが、こちらで補強して送り出すところまでできずにお任せしてしまって申し訳なかったと思いつつ、感謝でいっぱいです。

高田）どうせ補強するなら展示前にすればよかったと思っていました。子どもの作品なので真四角じゃないし。

西澤）めちゃくちゃはみ出してたり、めちゃくちゃ横に長かったり。

小林）皆さんが嘉人館長と触れ合いながら展示をしてくださった感じですよね。

坂本）伊丹の状況をお伝えしたいと思います。伊丹は 5 月 25 日から 6 月 27 日まででした。展示は昆虫館の中の特別展示室という、標本をたくさん置いてある部屋の１／３ぐらいのスペースを使ってやりました。展示のためにスペースをきちんと区切られていない空間だったので、お客さんにはわかりにくい空間だったかもしれません。6 月 1 日から残りの１／３ぐらいのスペースで、ムカデとサソリの展示をしており、世界の巨大なムカデとかがわんさか展示されていたので、そちらのインパクトがすごかったという印象がありました。そんな中で、持ってきた資料をそのまま展示する、という感じで行いました。なので、伊丹ならではの何か、は加えませんでした。5 月下旬から 6 月下旬は学校団体がたくさんくるシーズンで混み合うということと、展示室にスタッフが常駐しておらず、モノを触ったりすることがあるので、大物の資料を限定して「なみえっ子みこし」だけにしました。それ以外はパネルとかケース内に入る小さなものを展示するという構成にしました。運搬で横田さんには大変なご迷惑をおかけしました。昆虫館の中の展示なので昆虫を目的に見に来た人達がついでに見るためか、アンケートの回答数はそんなに多くはなかったです。期間中の館内の入館者数が 1 万 7 千人ぐらいだったんですが、館が狭いのでこの展示もちらりとは見た、という人は多いと思います。浪江展のためにわざわざやってきて、それを一生懸命見たと言う人がどれぐらいいたかは定かではないものの、アンケートの回答ではそういう人が回答してくれているみたいで、かなり熱心な回答がありました。それ以外でも僕が展示室でお客さんを見ていると、ムカデ展スゴイ！って盛り上がる人もいる一方で、家族連れで子ども達はムカデを見ているんだけど大人の人が浪江展を一生懸命見ていたり、展示室から立ち去ろうとするときにちょっと振り返って浪江展の看板だけ写真を撮っていく人がいたり、チ

伊丹市昆虫館からのメッセージ

ラチラと関心をもって見る人がいたのが、僕にとっては展示してみてホッとしたというか、やってよかったかなと思った点です。お客さんのアンケートの回答数は 30 件弱ぐらいですが、回答で人気だったのはカルタと新聞でしたね。カルタはそれぞれの感想みたいなのも展示したので、興味をひいたような感じが伺えました。アンケートの具体的なコメントは震災にからめてどうこうと書いている人もいたんですが、どちらかというと郷土に対する学びであるとか、子ども達が元気に郷土のことを学んだり盛り上げようとしたり、そういう様子についてのコメントが多かったです。うちの館も阪神淡路大震災で被災しましたが、そういうことは全く展示せずに浪江の展示だけにしたこともあって、その展示物からうける印象というのは被災というよりもむしろ郷土についての学びであったり、郷土についての思いみたいなものが色濃くでたのかな、という印象を受けました。

小林）こうやってお聞きするとあっという間の一年だった気がします。今言ってくださった郷土を学ぶということ、アンケートなども見せていただきましたが、カルタを通して皆さんそこを印象深く受け取ってくださっていました。あとでカルタのお話もできたらなと思います。改めて「10 年間ふるさとなみえ博物館」のモノの強さというか、当たり前に学校で作っているモノですけれども、あれが全体であれパーツであれ、伝える力がすごくあるものだなと思いました。看板をパシャって撮って帰られた方がいらしたみたいに、何気ないものでもあるのですけれども、一個一個の中に展示の効能というか力みたいなものを持っているということと、展示ってなんだろうということを考えさせてくれる展示でもあると改めて思いました。

横田）お神輿の影響力がすごいですね。私はたまたま休日に行ったんですが、子ども達がすごく多くて、子ども達が親御さんの手を引っ張って神輿のほうへ走って行くんですね。子どもはたぶんすぐに飽きてるんですけれども、大人の方が「なんだろうこれは？」って目を止めてくださっているような感じがあって、モノが身近に見れるということは力になるんだなということを感じさせる展示でした。

なみえっ子みこし。小学校の校章やなみえっ子カルタ、町の花であるキクなどで飾られている

高田）確かに虫の展示の一角だったのですが、コーナー分けがちゃんとされているので違和感はなかったです。棚の間がゆったりしていたのでコーナーとしては成立していました。アンケートもちゃんと書いてくれて、ちゃんと見てくれてるんだなと思います。ムカデのインパクトはすごかったですけどね。

北村）思った以上に存在感はあったなと感じています。「昆虫館でどうして浪江の展示なの？」というのはあ

ると思いますが、普段にはないジャンルの展示は、今まで目にする機会が少なかった人たちにもふれるきっかけになったんじゃないかなと思いました。館の種類とか展示の種類にこだわらず、そういう類のものも一定効果はあり、広く周知していくということは意味のある取り組みになってるんじゃないかなと思って見ていました。アンケートでも、これを見に来ている人がいるんだなと感じました。

坂本）浪江の展示は昆虫館からすると全く異質というか、この展示では昆虫を扱っていないので、からませ辛かったんですけれども、スペースがそんなに大きくなかったのでお客さんにも違和感なく空間の中にもぐりこませられたのかな、という気がしました。僕も急に主担当になり、以前の展示もあくあぴあ芥川しか見ていなかったんですが、うちのお客さんってあんまり展示の順路とか内容にこだわらずにあるものを見ていく人が多いので、そういう意味では無理なくできたということがあるのと、今回の展示ではほとんど震災のことを説明に入れなかったんですけれども、伊丹は阪神淡路大震災で被害を受けた町で、伊丹市昆虫館も当時10か月ほど閉館しました。そのためかどうかはっきりとはわからないのですが、市内では商店さんがイベントで復興のための商品を売ったりしていた記憶があったので、震災という切り口から関心を持つ人もいる可能性はあると思っていました。実際やってみて、狙って来たお客さんもちゃんといたので、ある程度のことはできたのかなと思いました。

小林）一通り各館のお話とご質問、感想を聞けたので、スタートに立ち返りましょう。西澤さんがこの展示の存在を知ってくださって、見に行こうとなって、北村さん、高田さんたちと津島小の中の教室の嘉人くんの展示を見てくださったところから始まったのですが、関西のみなさんに見ていただくべきだと、関西のミュージアム関係の方にも見ていただくべきだとの思いでの巡回展をやってみて、改めて西澤さんからも感想をお聞き出来たらと思います。

西澤）皆さん本当にありがとうございました。私が教室で「これ絶対に大阪でやらなきゃ」と大騒ぎしたのをこんなふうに受け止めて頂いて、本当に感謝しかありません。それに、すごくやりにくかったと思うんです。あくあぴあで始まった時にいろんな取材が入って「がんばった子どものいい話にされちゃうのがすごく苦しいんだ。そうじゃないんだ」というのを高田さんと話していたんですね。開催することそのものがずっと葛藤し続けるし、苦しいし。2つぐらい葛藤があったと思うんです。一つは「なんでうちやねん」ってどこでも言われる。もう一つは、展示しているものがこっちをすごく苦しめてくる内容じゃないですか。「お前は10年間浪江のことを知らないで何やってたんだ」ということを言われるモノを展示している訳じゃないですか。モノを持ってきてわーって展示して楽しい展示が回っていくっていうのと全く真逆の巡回展を皆さんがしてくださったと思ってるんですね。それぞれの館との展示との関係を苦しんだりとか、展示するモノそのものに展示する方が苦しみながらやってくださったということがすごく大きく意味があると思っています。とても感謝しています。感想の中では「福島のことを知る機会がどんどん少なくなってきてるから来ました」という伊丹での感想があったりですとか、「自分の中で何か福島のことを最近全然頭に浮かんでこないな」というふうに思った人が、情報を知って意を決して見に来てくださったと思うんですよね。ちなみに私の知り合いで、関西のほうで避難者の受け入れをしているような方々が、龍谷の展示をみんなで見に行ったと。感想は書いてこなかったけど行ってきたよ、というお知らせをしてくださって「すごい良かった」と言っていました。ニュースでは報道されない、こういう日常を見ないと被害はわからない、それがずっと続いていると

いうことを見せつけられて、すごく印象深かったという感想をもらって、それを聞いたただけでもやってくださってよかったなと思いました。このあとどんな風に展示が展開していくかわからないんですけれども、日常を見る意味、みたいなのをそれぞれの地域で感じてくださったのかなと思っています。行った私達、高田さん、北村さん、私は博物館の学芸員実習で学生さんに学芸員のことを教えますが、「学芸員を目指す人はみんなこの嘉人くんの博物館の使命を見るべきだ！」、という話をしたことを覚えています。あの紙一枚だけでも「ミッションって何？」みたいな話ができる展示だなと思っていて、そういうものを各館で展示していただいて、ありがとうございます。

小林）そうですよね。最初に言ってくださったとおり、子ども達の作品という姿はしてるんですけれども、その背景だったり全体をながめてみた時にすごく鋭く問いかけてくる、いろんな種類の問いがかかってくる展示なので、苦しみながらの展示というストレートな言葉が確かにそうだろうなと改めて皆さんに感謝を思いながら西澤さんの話を聞いていました。

川延）「関西すごいな」という感想です。今ずらっと皆さんが顔をそろえてお話しているのを聞くと、うまく表現できないんですけど「民主主義」だなと思った。そのミュージアムパワーはすごいですよ。おそらくいろんな、「なんでうちで」論とか、「なんで福島」とかいろいろあったと思うし、伊丹の昆虫館でこれをどうインストールするんだとか、並大抵のことではないと思うんですが、意外と皆さんそこをすんなり柔軟にこなしているというとヘンな言い方ですけれども、スマートに展開なさっていて、すごいです。これだけのネットワークの構築があるという、それがわかったことが僕にとっては皆さんのこの活動から一番学ぶことだったなと思います。

小林）本当ですよね。やろうといってすぐ動き出して、すぐ始まってしまうというこの即戦力というかすごい動き方が、なんかお～ってみるみる形になっていって。去年のはじめのころとか驚きをもって見ていました。こうして巡回展をやっていることを外に伝えようとして動いてくださっていたのが北村さんの学会発表だったと思います。

北村）6 月の初めに「日本ミュージアム・マネージメント学会」でポスター発表してきました。もう一つは、きしわだ自然資料館のメランジェゼミでもご報告しました。きしわだの場合は展示が始まる前だったので、展示に少しでも足を運んでもらえるきっかけになればいいなと思って。展示では伝えるのが難しい福島の状況とか二本松での展示のことをお話しできればいいなと思っていました。学会でも思いは同じで、少しでもたくさんの方に知ってもらえればいいなと思って。関西ではメーリングリストなどを使ってお伝えはしましたが、それ以外の所の方たちになかなか伝わっていないと思ったのと、伊丹市昆虫館での会期中だったこともあり、興味を持ったらそちらにも足を運んでもらえたらいいなと思いました。もう一つは資料を浪江町に返す時に「ただやりました」だけで返すのではなくて、きちんと学会とか、この業界の中での周知というのをさせてもらいましたという実績を一つでもいいからつけて返せたらいいかなと思ってお伝えした次第です。

手ごたえとしましては、きしわだでは質問もいただき、より背景がわかりましたなど、いくつかご意見を聞かせてもらえたので、それはそれでよかったかなと思っています。学会では「どうしてこれを関西でやったの」と、すごく聞かれました。どなたからも聞かれて。それを「まだ議論をこれから進めて行きます」と

しかお答えできなかったのが申し訳なかったなというのが反省です。「気にはなってたものの実際にどういうことか詳しく聞けてよかった」とか、「ぜひ自分のところでも取り組みが繋げていければ」と手を挙げてくださったのが新潟県立歴史博物館さんと、宮崎県の史料ネットワークさん。宮崎は大会みたいなのを1月末にされるそうなんですが、その際に九州の方にも伝えていきたいので協力してほしいと。次につなぐことは少しだけですけれどもできたので、それでよかったかなと思っています。これで終わりじゃなくてこの次とか次の発展のところの何かきっかけになってたのならば、よかったのかなと思いますし、私たちがやった巡回展の意味も一つ加わるのかなと感じた次第です。

小林）そうなんですよね。戻っていった「10年間ふるさとなみえ博物館」の資料たちが、浪江町の施設の壁面のケースの一つに入れられたとして、そこから何が伝わるんだろうとちょっと考えながら画像を見ていました。浪江の出土品からの浪江の歴史があって、もしかしたら現代の歴史の一つとしての紹介になるかもしれないんですが、あの展示が伝えてくれたこととか問いかけたことってすごくたくさんあって、それをどうやったらこの後も引き継いだりみんなで話したりできるだろうと、ちゃんとやっていきたいと、皆さんのお話を聞いて改めて思いました。佐久間さんは皆さんとオンラインで打合せをやっていたところからずっと参加していただいて、改めてこうして皆さんからお聞きして、今感じてらっしゃることとか、この巡回展から見えたこととかお考えのことがあったら教えていただければと思います。

佐久間）高田さんのところでは、あの展示物から浪江という地域を紹介しようとして、そこからその背景にある地震を紹介しようとして、さらに自分の地域の高槻まで紹介しようとして、ホップステップジャンプまでいこうとして、それで苦労したんですよね。平和祈念館さんは地域と結び付けて、その地域と近隣地域との結びつきを描き出したりして、それぞれのところで自分たちの展示あるいは地域とどう結び付けられるだろうというところで結構皆さん苦労された。けど、嘉人くんの展示っていうコアがあって、それにどうオプションをつけていくのかという、それぞれが決まったパッケージじゃなくて皆さんそれぞれに苦労されて展示をしていったところが、いろんな角度の味付けになって面白かったんだろうと思うんです。良かったんだろうと思うんですよ。結果、浪江という地域と、浪江の地域との向き合い方、という嘉人くんたちの営みが記録されて、地域と博物館の結び方ってこういうことなのね、みたいなものがある程度伝わっていった。というのが大事なところです。「関西ではこういうことが肯定されるんだ」ということが福島に持って帰られるということが、もう一つの大事なところです。ほんとは大阪市立自然史博物館でも展示したかったんですけど、春まで全然部屋が開かなくて、夏に大阪市が浪江町とのエネルギー協定を結んだからなんかやりたいとか言って、そんなん言うならやれやっていう話で環境局のほうに言ったんですが、実現しませんでした。嘉人くんのミッションは博物館学の教科書に載ります。放送大学の博物館経営論の教科書の中に私は書いてます。それについてはラジオのほうで小林さんにはたっぷり語っていただきました。来年の放送を楽しみにしてください。そんな感じで、関西の博物館それぞれでオプションでいろいろ料理していただいた。もう一つ、伊丹市昆虫館では浪江チャンネルの嘉人くんの番組を流してましたよね。あれがわりと全体の構図をちゃんと語ってくれているので、あれを足を止めてちゃんと見てる人がそこそこいた気がしました。あの番組はうまく語り部になってくれたかと思います。福島のこの地域を特出しして伝えるという以上に、博物館で展示したというのが意味があったんじゃないかと思いました。また大阪市立自然史博物館でもチャンスがあれば考えたいと思います。

横田）龍谷大の一つの特徴は、受付で来られた方々と言葉を交わすことが、他の館ではほとんどなかったことが十分にできてたと思うんです。これをまとめてちゃんと後で送らなくちゃいけないなと思って、今日改めて読みなおしたら、受付で 40 人ぐらい聞き取りしてるんですよ。アンケート書いてくださらなかった方で 40 人なので、来られた方でちゃんと意見拾えてない方が 3〜40 人しかいないぐらいの密度でとれてるんです。そこの中で、福島のこと、東北の震災のことっていう部分ももちろんあるんですけれども、資料そのものを見られている方の意見がけっこうあって、特に郷土学習、資料をどう作ってきたか、というところにすごくフォーカスを当てた感想が聞き取れています。これは大学という場所で学校教育のことをされる先生とか、それに関心を持っている学生さんもいるので、そういうことだと思うんですけれども。「総合的学習の非常によいモデルになっている」という評価を何人かの先生からいただいているので、展示物そのものもそうなんですけれども、どういうプロセスでこういうものが作られてきたかということを紹介することも意味のあることなんだなと感じられました。この場で出ている意見分布では、そういう視点、資料を作っていくプロセスの視点がちょっとなかったようなので、その部分だけちょっと意見をしました。

小林）郷土を学ぶということをカルタを通してご意見いただいたのはきしわだだったでしょうか、ご感想いただいたんですけれども、今回の嘉人くんの「10 年間ふるさとなみえ博物館」って、川延さんがおっしゃってたんですが、震災事体のことじゃないんですよね。震災から原発事故があって避難してきた。避難先で、復興に向かっていく 10 年間の中でどう小学校が小学校活動をしてきたか、あるいは地域の人と活動をしてきたか、ふるさとのことを離れた中でどう学んできたかということの集合体で、嘉人くんのミッションも震災のこととか浪江のことを伝えたいではなくて、二本松での浪江小、津島小のことを伝えたい、というのと、ここで避難してきた人たちのためにその人たちを喜ばそうと思って自分たちが何をしてきたかを伝えたい、なんですよね。だからスタートの 2011 年 3 月ではなくてそれ以降の 2021 年までの 10 年間をどうやってきたかの足跡なので、震災そのものというよりはどう復興、復興じゃないですよね、復興という言葉は合わない気がしますが、どう 10 年間を過ごしてきたかの集大成なので、そこの部分をちゃんと伝えられればいいという話をしていたのを、横田さんのお話を聞いて思い出しました。そこに改めて総合学習の意味だったり、ふるさとを学ぶことの意味もあるでしょう。特に今回あまり直接巡回展の中でお名前が出てこなかったんですが、ずっと津島小浪江小を支えてきたのが、二本松に避難している浪江の皆さんでした。避難した皆さんにとっても元々の地域の小学校が自分たちと一緒に避難して、近くにあることの意味ってとても大きかったんですよね。そういう小学校の意味みたいなこと、地域にとっての意味みたいなことを改めて話せるといいかなと思っていました。

高田）横田さんの話で私も思い出しました。「ふるさとなみえ科」というプログラムで小学校での郷土教育をしてらっしゃいますよね。改めて自分とこの市は郷土教育をしてるのか、と思って、「防災教育はしてますか？」と「高槻市の郷土教育はやってますか？」を学校の先生に聞いたら「いや、やってないですね」という先生が多いんです。「私たちの町たかつき」という副読本が、3 年生か 4 年生であるんですけれども、全然更新されてなくて、古い写真を使いまわしたり、マイナーチェンジしかしていなかったんですよね。「ふるさとなみえ科」のことを知って、「もっと郷土教育せなあかんやろ」と思って、副読本の改訂に口を挟みたいと思ったんですが、タイミングを逃してしまいました。自分が育った町のことってあんまり習ってないと思う

んですよね。誤解を恐れずにいうと、ふるさとから出て行かざるを得なかったから一生懸命郷土教育をしておられる部分もあるだろうとは思うんですけれども、自分の町を小学校で習うということのモデルにもしていいんじゃないかと思いました。最初は浪江のことを学習されていて、途中から浪江を知らない子どもが増えてきたから方針転換して二本松のことを学習してらっしゃる。すごく柔軟にしておられるな、と思いました。地元の姿とか、自分の校区のこととかを、総合学習などで取り入れられないかな、と思いました。

佐久間）「浪江という地域と向きあう」と、さっき僕も言っちゃったんですけれども、結局のところ「避難してきた人の記憶の中にある浪江との向きあい方」だったんじゃないかな、と僕は思っています。高齢者の人々との交流も含めて「薄れゆく記憶をつなぎとめる」みたいなところも含めての地域との向き合い方だったのかな。2011 年を扱ってるわけじゃなくて、2011 年以降の生活を扱ってきてるんだけど、そのまなざしの向こうには、それこそ「ふるさとなみえ」があるっていう、そういう構造なんだよね。それは福島の文脈の中でこそ伝わるのかなとは思ってて。関西に持ってきちゃうと「避難した小学校が作ったんだ」という構造の部分まで思いを馳せるのは観覧者にはしんどいのかなと思っていて。もう一回福島でそうやって展示を作るのなら、「そこを大事にしたいよね」っていう気がした。

小林）わかります。さっきダムのお話が出てましたけど、ふるさとを強制的に失ったり離れなきゃいけなくなったっていう場所との重なり具合はあるんでしょうね。「そういう所」とか、「そういう経験をした方」にとってはすごく近しいところもあるのかなとも思います。いろんな場所が今まさにそういうことに見舞われないともかぎらない状況ではあるので、これはある意味浪江だけのことではないのかなと思います。

西澤）私の希望ですが。さっき小林さんが「一個一個のモノの資料の持つ力が伝わったのかな」って話をされてましたし、横田さんのほうも資料をじっくり見る方が多かったって話があったんですけれども、浪江町の展示室に資料が資料群としてちゃんとまとまって残ってほしいなとすごく思います。あの小さいガラスケースのどこかに、一つの現代の物語としてちょこっと展示されるだけだと伝わるのかなと感じたりしました。一教室が持ってた力っていうのがものすごかった、できるだけまとまって展示してもらいたい。時代ごとにちゃんと小林さんが学芸員として関わられて情報を整理して、だからこそあの展示になったと思うので、ぜひまとまって残ってほしいなと思って手を挙げました。

小林）ほんとに私もそう思います。浪江を伝えたいですね。そういうことも。

川延）結局今のこの資料って一次資料ですよね。一次資料が一番尊いものなのは当たり前ですけれども、資料を取り巻く二次的な様々なドキュメントとか言葉の集積も本来あるんですよ。そこが今回は、今回も含めてこれまでも紹介できていないのが、これまでの皆さんからの、さっきの横田先生も含めての声だったのかなと思う。一次資料を使って今回の関西での動きがあったっていうのもすごい今後についての大きなアーカイブになっていく。今度一次資料をめぐる研究誌を作っていく段階に入りつつあるのかなと思いますね。ほんとうにいいきっかけ、突破口を開いてくれたなと思います。西澤さんが言うように切り離したら何の意味もない。

小林）ほんとですね。そして多分これからみなさんで作る報告書が研究の第一歩にもなるのかなと思います。

横田）今回龍谷大での展示に足を運んでくださったのが、小林さんたちが 620 ㎞離れたところから来ていただいたんですけれども、実は 650 ㎞離れたところから来ていただいた方がいらした。福岡なんですけれども。その方が龍大の展示を 2 時間ぐらいかけてみてくださったんです。その方は「浪江の中でまとめて展示してほしい」と述べられて帰られたんです。今の一次資料は現場に近いところで保存されて、そこで見るのが一番いいんだろうな、と改めて今話を聞きながら感じましたけれども、九州でもそこに関心を向けて見たいという動きがある。宮崎のほうで関心を持っておられると聞きましたし、巡回展もしながらまとめて収蔵できる形ができるといいのかなと思いながら最後の話を聞いていました。

小林）人任せにしてはいけないので、そうなるための努力を引き続きしなければいけないな、と思いました。

川延）僕さっき民主主義って言っちゃったんですけれども、これは自治だね、自治。

小林）自治ね。なるほど。それぞれみなさんがね。なるほど。すごいことですよね。福島県博物館連絡協議会にこのことをちゃんと報告して、聞いてもらわねば。

佐久間）陸前高田の資料があれだけ全国巡回したんだから、今回のだってもっと巡回したっていいよね。防災のことを考えるだけじゃなくて、こういうことにリアリティを感じることがすごく大事なことだと思うので、それこそネットワークの予算を狙って手を挙げていくのも悪くないと思います。

小林）ほんとにもうちょっと回せるかもしれないですね。そういう声があるので、新潟とか宮崎とか、ほんとに実現したらいいなと思います。私達は私達で、福島で見てこその部分はちゃんとやっていきたいなと思います。ほんとに理想的には教室の一室を再現できる空間を確保してあの状態で展示ができれば一番いいなと思うんですが。私もできるだけのことをしていきたいと思います。

高田）皆さん本当に巡回展お疲れ様でした。支払のこととかも大変な目にあっていただき、すみませんでした。横田さんが場所と搬出入をがんばってくれたおかげでなんとかうまくできました。基地になっていただかなかったら無理やったかもしれないなと思っています。本当にありがとうございました。報告書の印刷費はないので(NPO)西日本自然史系博物館ネットワークのホームページに PDF でアップするのがいいのかなと思っています。いったんここで中締めということで報告を出して終了し、宮崎とか新潟とかどこかでお声がかかれば協力できる範囲でしましょう、ということにします。本当に皆さんお疲れ様でした。

小林）では、本当にみなさんありがとうございました。御礼しか言えませんが、私達福島県博も引き続きできることを探していきたいと思います。まだ結果が見えてないのでなんともなんですが、助成金の申請を出していまして、無事に通りましたら、その時は福島でこういう議論を今度リアルにできればと思っておりますので、その時にはまたお声かけさせてください。私からは以上です。みなさんありがとうございました。

展示の放つメッセージを考える

「10 年間ふるさとなみえ博物館」を関西に巡回した意義は何だったのだろう。それは、この「10 年間ふるさとなみえ博物館」とは何だったのか、そして「浪江」という地域をどう考えるのか、ということにつながる。2011 年まで、浪江は日本の歴史に登場する地名ではなかった。しかし、そこにはそのほか全国の地域と同様に、祭りがあり、食文化があり、地域の営みがあった。それは地名を伏せた形で「ザ！鉄腕！DASH!!（日本テレビ）」のロケ地になるなど、典型的農村、というイメージだったのだろう。

そして東日本大震災と未曾有の原子力発電所事故があり、全町避難という形での営みの断絶が起きた。その悲劇性を持って浪江の地名は全国的には被災、原子力事故の象徴として記憶されることになる。しかし、当事者にとってはあくまでも「ふるさと」なのだ。それは 2021 年 3 月で閉校となった避難先の浪江町立小学校の子どもたちにとってはまた少し違うまなざしではなかったろうか。「ふるさとなみえ科」で浪江と、そして高齢者の思い出と向き合うも、だんだんと小学生は避難前の記憶をほとんど持たない世代になる。それでも自分らが向き合ってきた活動をこの展示にまとめた。その経緯、避難先の小学生の置かれた立場を思い起こすと、須藤嘉人さんが使命として掲げた「二本松の浪江小と津島小の歴史を伝える。10 年間に先輩とぼくがやってきたことを伝える。東日本大震災で避難してふるさとがなくなり、悲しんでいる人を喜ばせたいという思いを知ってもらう」と書かれた目線がよく伝わるのだ。

関西でこの展示を巡回したことによって、被災、原子力事故を思い起こさせる象徴としての失われた浪江というレイヤー、浪江という地域との向き合う子どもたちの活動の結晶した形としての「博物館」というあり方というレイヤーまでは様々な博物館の努力として伝えることは出来たかもしれない。背景にある地震のメカニズムや地域防災、周辺地域と浪江の結びつきなど様々な工夫を博物館ごとに試みていただいた。その工夫、チャレンジ自体が今回参加していただいた各博物館の底力だと改めて思う。文化財とはまた異なる、手作りの展示物の持つメッセージの強さを感じもした。

その一方で、避難先の教育活動と子どもの目線をどこまで共感を持って読み取ることが出来ただろう。このことは、自らが避難者であった、あるいは地域社会に避難者を受け入れてきた、福島とその周辺地域で展示してこそ強いメッセージを放つレイヤーなのかもしれない。展示をする博物館の注目する点と、そして見る人が、どのような立場でこの展示を見るのか。博物館によって、地域住民のバックグラウンドによって、展示は放つ色を変える（意図的であれ、非意図的であれ）。だからこそ、この展示が再び福島で展示されるところを見てみたい。この展示のオリジナルは明らかに、津島小・浪江小を取り巻く人たちに向けてメッセージを放っている。それは、少々時間がたってみることでより強さを増しているようにも思うのだ。関西という全く違う場所で巡回することで、この展示の放つメッセージの多層性がより強く意識されたように思う。

大阪市立自然史博物館
学芸課長　佐久間大輔

おわりに

地域の博物館は地域を物語る資料を集める、それは当たり前のように思うかもしれません。でも、それはなんのために？　過去に築かれた文化財を現在に伝え、未来へのヒントを探すためだと言われます。陸前高田市立博物館の熊谷賢学芸員は、「文化財の再生は街のアイデンティティーを復元する営み。文化財の残らない復興は本当の復興ではない」と述べ、被災から 11 年全国の博物館と協力して、文化財の修復と博物館の再建に向け歩みを続けました。この歩みを後押ししたのは陸前高田の人々であり、国民でした。

自然史資料を含め、博物館の資料や文化財を集め、守り、伝えていくのは住民の意志であり、想いです。須藤嘉人さんも含め学芸員はその「代行管理人」でしかありません。資料や文化財は、社会のつながりの中で維持・保全することが原点であり基本だ、博物館もまたそこに立ち戻る必要がある、という再確認を込めて、この小冊子を印刷配布することにしました。ご活用いただければ幸いです。

大阪市立自然史博物館
学芸課長　佐久間大輔

10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展　報告書

2022 年 9 月

発行：
特定非営利活動法人　西日本自然史系博物館ネットワーク
「10 年間ふるさとなみえ博物館」巡回展示実行委員会
伊丹市昆虫館
きしわだ自然資料館
滋賀県平和祈念館
大東市立歴史民俗資料館
高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）
特定非営利活動法人　西日本自然史系博物館ネットワーク
認定特定非営利活動法人　大阪自然史センター
龍谷大学理工学部博物館学芸員課程
結 Creation

協力：
浪江町教育委員会、ライフミュージアムネットワーク

この冊子は JSPS 科研費（JP19K21658）の成果の一環として印刷・配布しました

津
小